

第13次 パレスチナ医療・子ども支援活動

期間 2019年10月20日～11月10日



Hokkaido Medical Service for Palestine (HMS4P)

北海道パレスチナ医療奉仕団

目次

「第13次パレスチナ医療・こども支援活動」要綱	3
The 13th Palestinian Medical and Child Support Activities (Summary)	4
第13次行程	5
「第13次医療・こども支援活動」報告	
北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚 義夫 (団長 整形外科医)	6
第13次活動報告『子ども支援 (スポーツ交流)』	
細川 佳之	24
北海道パレスチナ医療奉仕団 第13次支援活動報告	
井上 智美	31
絵で占領を表現するーガザでの絵画プロジェクトの開始	
清末 愛砂 (室蘭工業大学大学院准教授)	33
「第13次パレスチナ医療・こども支援活動報告」	
米林 嶺	35
第13次パレスチナ医療・こども支援活動報告	
宮岡 慎一	38
第13次支援活動に参加して	
坂東 和之 (元北海道新聞カイロ駐在記者)	42
資料	43
第13次支援活動以降の活動内容	47

「第13次パレスチナ医療・子ども支援活動」要綱

「北海道パレスチナ医療奉仕団」2019年10月

私達が、2011年から医療支援活動を始めてから今回で13次となります。
これも皆様からの温かい支援によるものと心から感謝申し上げます。

I) 今回の活動内容：

これまでの診療と子供支援活動としてのスポーツ・アートの交流に加えて今回の特徴は、以下の様に考えています。

- ① ガザ地区で国連 UNRWA の要請でリハビリ技師養成講座の開催
- ② 障害者・児支援継続
- ③ 第2回エルサレム講演会：「パレスチナと沖縄・北海道」
- ④ シュファット福祉センターと「医療奉仕団」の友好団体締結
- ⑤ 国際反核医師の会（IPPNW）パレスチナ支部との連携
- ⑥ ヨルダン川渓谷への支援活動の着手
- ⑦ エルワッフア・リハビリ病院、JVC との連携
- ⑧ 坂東さんの参加で、「証言活動」など新しいを学び実践する
- ⑨ 若手・宮岡さんの参加で、ガザの医学生、西岸の青年医師と交流
- ⑩ 道立札幌南高・「南校祭」、難民問題の取り組みをパレスチナへ紹介・交流

II) 期 間：2019年10月20日～11月10日

III) 支援場所：ヨルダン川西岸（シュファット、ヘブロン、ヨルダン川渓谷、ピリン村をヨルダン渓谷へ） ガザ地区

IV) メンバー（7名）

猫塚義夫	整形外科医：団長
細川佳之	高校教諭：スポーツ・子ども支援 副団長
井上智美	看護師：医療支援 副団長
米林 嶺	医療事務：医療担当・会計
清末愛砂	室蘭工業大学准教授：絵画・子ども支援
坂東和之	北海道新聞元カイロ支局長：組織・広報
宮岡慎司	医学生（北大医学部6年目）：医療支援

V) 在札幌部

本部長：宮島 豊 副団長

高崎 暢 弁護士、松本 一敏、西岡 利泰、齋藤 育、相澤 依里、他

The 13th Palestinian Medical and Child Support Activities (Summary)

" Hokkaido Medical Service for Palestine " September 2019

I would like to express my sincere appreciation for this warm support.

I) Details of this activity:

In addition to the current medical care and sports / art exchange as a child support activity, the characteristics of this time are as follows.

- ① Holding rehabilitation technician training course at the request of UNWA in Gaza Strip
- ② Continue support for disabled persons and children
- ③ The 2nd Lecture in Jerusalem: " Palestine and Okinawa / Hokkaido "
- ④ Concluded a friendship group with Shufat Welfare Center and "medical service group"
- ⑤ Cooperation with International Antinuclear Medical Association (IPPNW) Palestine Branch
- ⑥ Start of support activities for the Jordan Valley
- ⑦ Collaboration with Elwaffa Rehabilitation Hospital and JVC
- ⑧ Learning the perspectives and methods of new activities with the participation of Mr. Bando
- ⑨ Exchange with Gaza Medical Students and West Bank Youth Doctors with the participation of Mr. Miyaoka who is medical student of Hokkaido Univ.
- ⑩ Introducing and interacting with the prefectural Minami High School, " South School Festival " and Palestinian refugee issues

II) Period : October 20-November 10, 2019

III) Support location: West Bank (Schufat RC, Hebron, Jordan River Valley, Village, etc.) Gaza Strip

IV) Members (7 people)

Yoshio Nekozyuka (Orthopedic Surgeon) : Head of this Team

Yoshiyuki Hosokawa (High School Teacher) : Sports / Child Support

Tomomi Inoue (Nurse) : Medical support

Ryo Yonebayashi (Medical affairs) : Medical charge / Accounting

Aisa Kiyosue (Associate Professor, Muroran Institute of Technology) : Support for Painting and Children

Kazuyuki Bando (Former head of the Cairo Branch of Hokkaido News paper company) : (Organization / Public Relations)

Shinji Miyaoka (Medical student in Hokkaido University School of Medicine): Medical support

Billing Headquarters

General Manager: Yutaka Miyajima

Toru Takasaki, Kazutoshi Matsumoto, Iku Saito, Eri Aizawa, Ryunosuke and Ishizaki, etc.

第 13 次行程

		猫塚義夫	宮岡慎司	清未愛砂	坂東和之	細川佳之	米林 嶺	井上智美	
		医師	医学生	准教授	広報	教員	医療秘書	看護師	
10月19日	土								
20	日	千歳発	千歳発	千歳発	千歳発				
21	月	西岸着	西岸着	西岸着	西岸着	千歳発	千歳発		ｼﾌﾌｱｯﾄへ挨拶・サリム先生と打ち合わせ破壊プール視察 夕食美恵子
22	火	西岸	西岸	西岸	西岸	西岸着	西岸着		エルサレム細川・米林さん合流…エルサレムへ 旧市街内破壊家族 訪問…カメラ破壊
23	水	西岸	西岸	西岸	西岸	西岸	西岸		溪谷視察・懇談 夕方…ガザ行き準備
24	木	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1		午前 ガザ 入域 ……UNRWA事務所、14:00 prep Boys B school バレーボール教室 (先生対象) 宿舍…
25	金	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1		AM11:00～ ワッフア病院事務局長、14:00～ リームさん宅昼食 16:00～GMR視察 (ガザ市東部)
26	土	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1		9:00～11:30 ハンユニス診療所 Bani Sohaila Prep Girl school in Khan younis バレー、絵画
									12:30～13:30 デルバラ Maghazi Prep Girls B School バレーボ ール、14:00～15:00 デルバラPrepBoys B school 絵画
									夕方：JICA Saher 所長とお茶 藤原氏友人の家族の診察・コンサルト
27	日	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1	GAZA 1		9:00～11:30 Bureji HC GMR患者、リハビリ 午後、ガザ出域 清未・坂東送別会
28	月	西岸	西岸	西岸発	西岸発	西岸	西岸		清未・坂東帰国 AM 診療 (シュファットHC) 葉持参 夕方 細川・米林送別会
29	火	西岸	西岸	千歳着	千歳着	西岸発	西岸発		細川・米林帰国 9:00～ 診療 (CC)
30	水	西岸	西岸			千歳着	千歳発着	千歳発	9:00～診療 (CC) 午後井上さん 合流
31	木	西岸	西岸	PM西道さん				西岸着	診療
11月1日	金	西岸	西岸	西道さん				西岸	ピリン村デモ
2	土	西岸	西岸	西道さん				西岸	AM ヘブロン・イッサ懇談 エルサレムデモ 夕方GAZA準備
3	日	GAZA 2	GAZA 2					GAZA 2	午前 GAZA 入域 ……UNRWA事務所、宿舍…
4	月	GAZA 2	GAZA 2					GAZA 2	AM GAZA RH 講座
5	火	GAZA 2	GAZA 2					GAZA 2	AM GAZA RH 講座 SULUFAなどで買い物
6	水	GAZA 2	GAZA 2					GAZA 2	イスラミック大学看護学部 診療、リマインドHC PM GAZA出域
7	木	西岸	西岸					西岸	診療 (シュファット、CC) PM ベドウイン集落
8	金	西岸	西岸					西岸	Ayalon Canada Park 帰国準備
9	土	西岸発	西岸発					西岸	
10	日	千歳着	千歳着					西岸発	
11	月							千歳着	



「第13次医療・こども支援活動」報告

北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚 義夫（団長 整形外科医）

第13次医療・こども支援活動の内容とパレスチナの実態とともにヨルダン川西岸と「ガザ地区」で考えたことを報告いたします。

10月20日（日）第1日目

本日から11月10まで「北海道パレスチナ医療奉仕団」による『第13次医療・こども支援活動』のため、モスクワ経由でイスラエル・テルアビブへ向かいました。

中東をめぐる情勢は、安倍政権による中東への自衛隊派遣決定という、日本の外交政策の「歴史的転換」の真ただ中にあります。非武装・非暴力の立場をとり、日本国憲法が掲げる「平和的生存権」に基づく私たちのNGO活動にとっても困難をもたらす可能性があるのでした。

まず、第一陣の猫塚・宮岡、清末・坂東組の到着です。厳しいと言われている、イスラエル・テルアビブ、ベングリオン空港での入国手続きも無事に通過することができました。緊張感の中で通過できた清末先生の笑顔が印象的でした。

今回の支援活動に参加されているジャーナリストの坂東さん、医学生の宮岡さんの活躍も期待されています。坂東さんには、西岸とガザ地区の地域に入り難民の方々からの様々な「証言」を取ることを中心になります。ま



東エルサレム・シュファット難民キャンプの出入り口の検問所。イスラエル兵と入植者によるパレスチナ難民へのIDカードのチェックが行われている。

た、医学部6年目の宮岡さんは、豊富な海外経験をもとに現地の医学生や若者たちとの交流を行う役割があります。

また、札幌南校と札幌国際情報高校の生徒さんたちから託されたメッセージポスターを通して、パレスチナ・ガザ地区の生徒たちとの交流の実現を目指します。

10月21日（月）第2日目

昨夜の疲れを取るために、ミーティングを兼ねて9:00から遅めの朝食としました。今のエルサレムは、歩くと汗ばむほど暑い日が続きます。

両替と携帯電話のチャージ、飲料水の確保後、シュファット難民キャンプクリニック・サリム先生にご挨拶と活動計画の確認に行きました。海外経験が豊富な宮岡さんが会計係を担当していますので安心することができました。

いつもの路線バス207に乗車しシュファット難民キャンプへ向かいました。キャンプの出入り口は、依然としてイスラエル兵と入植者による検問が続けられています。その周りには、装甲軍用車が控えています。

問題のひとつであるゴミ処理について、国連UNRWAがゴミ集積場を建設しこれまでよりも若干清潔になりました。

国連UNRWAクリニックに挨拶に行くと、サリム先生はもとより看護師さん方が笑顔で迎えてくれました。これまでの10回以上にわたる支援活動によりクリニックの職員との信頼関係の構築が成功しているものと思われました。



シュファット難民キャンプ診療所（UNRWA）サリム先生と再会の挨拶。

今日は診療を予定していませんでしたが、サリム先生は2名の患者さんの診療を用意していました。一人は、21才の男性で両変形性股関節症。幼小児からの発症で、もし早く見つけることができればこれほどまで悪化はせずに済んだと思われました。残念ですが、次善の治療法を行わなければなりません。もう一人は、64才の男性で、左膝内側半月板損傷の疑いです。後日にレントゲン検査などを組みました。

その後、やっと本題の「活動ミーティング」の開始です。

- ① 診療活動
- ② シュファット難民キャンプの福祉協会と「北海道パレスチナ医療奉仕団」との間で夕友好団体関係の締結を準備してくれました。交換する確認文章の原案が示され、10月29日の締結セレモニーまで、双方で議論を深めることにしました。
- ③ 今回の「絵画活動」を福祉協会の幼稚園にて行うこと。
- ④ 砂漠の遊牧民であるベドウイン集落での無料検診。



分離壁に隣接した所にある破壊されたプールは、建物の残存部分で運営を開始していた。

などを確認いたしました。

お昼過ぎに、クリニックを後にしてシュファット難民キャンプ（RC）内の「観察」へ。特に坂東さんと宮岡さんは初めてのシュファットRCなので、ゆっくり移動しながら「昨年破壊されたプール、その後の様子を見に行きました。

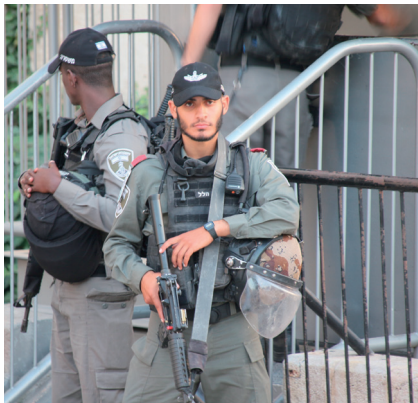
プールは、板張りで修復されている中で一応泳げる状態にまで復旧していました。しかし、これはイスラエルが認める公的な運営ではなく、あくまで



ダマスカス門にあるイスラエル兵の監視所は、コンクリート製に作り替えられていた。



ダマスカス門の監視所には 24 時間体制で若いイスラエル兵が立ち、パレスチナ人への監視を続けている。



パレスチナ人を監視するイスラエルへは無表情で、時には鋭い眼光で睨みつけられることもある。

も「私的使用」に限られていました。一方で、いつイスラエル兵が破壊に来るかもしれない状態の「綱渡り」に見えるのでした。ここで、イタリアの学生を案内していた日本国際ボランティアセンター（JVC）のYさんにお会いし、お互いに再会を喜び合いました。

その後、旧市街地へ移動。パレスチナが初めての宮岡さんに状況を説明しながらの移動です。

有名なダマスカス門ではしっかりとイスラエル兵の監視が続き、旧市街内でもいつもの地点でも同様な光景が続いているのです。（動画参照）

この間、旧市街地の中でもイスラエル兵と入植者によるパレスチナ人の家屋破壊が続いています。その中のひとつであるミタム家を訪問しました。およそ9ヶ月前に隣の入植地が拡大接近し、この家にもイスラエル兵が直接攻撃を加えてくるようになりました。

それに抵抗する家族の皆さんの中で、長男10回、二男5回、三男3回、母親1回の拘束が行われてきました。11歳の男の子は右前腕不全骨折を受け、15才の男子には厳しい尋問が待っていました。

家族が拘束されると釈放を求めて大金を用意しなければなりません。それだけで、家族が経済的に破綻し、いやいや家屋をユダヤ人に明け渡さざるを得ないように仕向けるのです。こうしたイスラエルの陰湿なやり方に心から怒りが湧いてくるのでした。



入植者からの直接攻撃があるにもかかわらず、笑顔で私達を迎えてくれるミタム家の人々。

この家屋は 500~600 年前からある古いものなのですが、こうした歴史的建造物へをパレスチナ人の人権を破壊してわがものにしようとするイスラエルのあさましさが見え隠れするのです。

階下に降りると美味しいパン屋さんで営まれています。ここもイスラエルからの立ち退き行動に会い、それに抵抗したご次男が遠いアシュケロンに30日間拘留され、昨日釈放となったばかりでした。

尋問とは名ばかりで、「拷問」といっても構いません。一日の尋問時間は12時間にも及び、本人が答えようもないことを聞かれ続けられました。しかも尋問するのはすべてイスラエルの内通者になり下がったパレスチナ人です。また、これまでの尋問=拷問の中でイスラエルからの内通者になることを進められました。こうした卑劣なやり方は、軍事占領者が行なう常套手段とは言え聞くに堪えられないものなのです。

ミタム家の屋上で、家屋の周囲を視察したりお茶をいただいていると、EAPPI (Ecumenical Accompaniment Programme in Palestine and Israel) の6人のメンバーがやってきました。これまでも時々お会いしていた国際NGOですが、ここでも即席の交流を行うことができました。

さて、明日は細川先生と米林嶺さん



ヨルダン川西岸とエルサレムで、イスラエルによるパレスチナ人への弾圧を監視する EAPPI のメンバー。

がエルサレムに到着です。強力な二人の合流でしっかりした活動が楽しみです。

10月22日（火）第3日目

早朝7:00から朝食を済ませ、ミーティングの後シュファット難民キャンプへ。8:10難民キャンプ着。本日の絵画教室の準備にキャンプ内の文房具屋さんで、用紙、絵の具、筆を購入してクリニックへ向かいました。私達は活動に必要なものをできる限り難民キャンプ内で購入することにはしているのです。

8:30にクリニックへ「出勤」、昨日お願いされている下肢の火傷（やけど）の少年を往診に出かけました。場所は、隣のアナータ村です。4ヶ月前に下肢・膝下以下に火傷を負ってラムジー君は11歳です。ここから遠いラマラまで治療に通院しています。火傷の程度は2度の熱傷で皮膚移植はせずに、何とか保存治療で行けそうでした。ガザから出てくる来週に再度往診し、サランラップによる湿潤療法を選択したのでした。このサランラップは清末女史が一生懸命に調達してくれました。同時に、足関節の尖足位拘縮となっているのを除去しなければ、熱傷が改善しても起立歩行が困難なためスプリントの装着とリハビリをお願いしました。

しかし、問題なのはこのご家族の貧困状態です。ご主人の収入が約60,000円にもかかわらず、家賃が30,000円、生活費が30,000円、その上にラムジー

君の治療費が毎日4,500円（保健も利かず、全額負担）なのです。およそ、お大きな借金をしながらの治療に違いありません。ちなみに彼の家族はこども5人の7人家族なのでから経済的にもとても苦しいに違いありません。私達は、あらためて難民生活の経済的破綻を実感させられるのでした。

その後、クリニックへ戻り近くにある民間の幼稚園で絵画教室です。およそ100名の園児たちは、絵の具絵を用いて絵を描くのは初めてのようで多少興奮気味ですが、清末女史の指導と幼稚園の先生方の協力で力強くまた綺麗な絵を描いていただくのに成功しましたのでした。

一方、診療は不意に14名の患者さんが来られ、次回GAZA①での活動後の再診と専門病院への紹介状書きに追われました。やはり、肥満による膝関節の影響は否定しがたく、ここでもダイエットと運動療法の重要性が指摘されるのです。これは、中東での健康問題においては中心問題にならざるを得ません。ガザから出くる来週にもう一度の診療を計画いたしました。

この時、第2陣の細川先生と米林嶺さんがエルサレムに到着し、そのままシュファット難民キャンプに駆けつけてくれたのです。

また、第3陣の井上智美さんに内反膝の治療に必要な装具を札幌から持参するように依頼することになりました。

同時に、クリニックのロビーでは清末女史による「絵画教室」が開催さ

れ、幼稚園とは違い多少、時間をかけた指導が行われました。双方の絵画は、北海道へ持ち帰り皆さんの目に届けたいと考えています。

その後、難民キャンプから宿舎へ戻るにあたり、難民キャンプのすべてを統括するUNRWAのフィールドオフィスを訪ね、挨拶と同時に医療以外の教育問題も含めて責任者と議論を行うことができました。

今夜の夕食は、サリム先生、その息子さんのムハンマド医師との会食となりました。お二人とも札幌・北海道・沖縄に来たことがあり、当時のお話しは盛り上がるると同時に来年の日本への招聘に大いに花が咲いたのでした。

10月23日（水）（第4日目）

パレスチナでは、ガザ地区が12年以上にもわたってイスラエルによる「完全封鎖」が続けられている一方、西岸地区では「入植地」の拡大＝西岸への侵略が続けられています。

中でも、西岸地区にあるヨルダン渓谷は、イスラエルの軍用地を抱えていてその度合いが著しいところです。

渓谷は、隣国ヨルダンとの国境にあるヨルダン川に面してパレスチナの中では農作物が取れる豊かな大地です。そこに注目したのかイスラエルは、「入植地」建設に力を注いできました。それは同時に、それまで農業や牧場を営んでいたパレスチナ人やベドウィンの方たちが土地を奪われるということなのです。

本日は、ヨルダン渓谷連帯委員会



11歳のラムジー君。両下腿以下に受けた熱傷により皮膚癒痕を生じ、両足関節の尖足位拘縮で困難となっている



シュファット難民キャンプで幼稚園児に水彩画の手ほどきをする清末愛沙先生。勿論、絵の具の使用が初めての子供たちもいる。



絵画は現地の子供たちとコミュニケーションを可能としてくれる。初めて書いた絵を掲げる子供の誇らしげな目にも心を奪われる。

(Jordan Valley Solidarity) のラシッド氏に会い、渓谷の医療事情、イスラエルによる家屋破壊の実態などを学ぶため早朝からエルサレムの宿舎を後にしました。

路面電車と路線バスを乗り継ぎ、渓谷のメロハへ……。そこに、ラシッド氏とドライバー、それからスペインからの二人の若い女性のボランティアの方たちが私達を待っていました。

早速、バルダラの村が運営するクリニックへ。村長さんとムハマド先生の説明では、救急の患者さんは出ても25km先の病院まで送ることが大変困難な状況が語られました。その原因は、イスラエルによる検問所の存在、時には勝手に作られる移動検問所により、患者さんの受診や搬送が大変な制約を受けているとのことでした。また、財政難のため薬剤や医療機器の不足が強調されていました。

さて、その後はラシッド氏による「渓谷とJVSの活動」についてのレクチャーが持たれました。スローガンは「TO EXISTENCE IS TO RESISTANCE」（存在することが抵抗だ!!!）です。

イスラエルの軍需占領下にある渓谷の問題点を以下にまとめてくれました。

① イスラエルによる「水」の収奪の問題。水は、人権であることを強調。イスラエルの水企業により、パレスチナ人の土地深くから協力的なポンプで水を奪ってしまいます。それもイスラエル軍の庇護のもとにです。

② 隣国ヨルダンとの「国境管理」による、軍隊の存在です。イスラエルによるセキュリティの強化は、渓谷に住むパレスチナ人やベドウィンに多大な弾圧的負荷をもたらしています。

③ 「検問所」の多さと厳しきです。特に、渓谷への出入り口5カ所に設置されている5カ所の検問所（プラス移動検問所も）は、移動の制限をきたし日常生活や医療へのアクセスに多大な悪影響を出しているのです。

④ 「家屋の破壊」が続けられ、入植地の拡大の手段となっているのです。

⑤ パレスチナ人を住めなくして置いた上に、最終的に「土地の没収」が行われます。渓谷の人口比でみると13%の入植者がじつに86%の土地を使用しているではありませんか!!!

これらを通して、ここ渓谷では、イスラエルによる「アパルトヘイト」が進行しているのがよくわかりました。

パレスチナの郷土料理であるマックルーバによる昼食後に家屋破壊と闘っているベドウインの家を訪ねました。

それは、アブサテルさんのところでした。その家の周りには入植地が迫り、周囲には金網に囲まれた入植者の畑が広がっています。遠くの丘の上にはイスラエルの軍事施設も見えていました。

ここで、羊を飼いながら「自分の土

地」をイスラエルと入植者が奪おうと彼らなりに必至なのです。アブサテルさんのお話では、2015年12月に1日で23回の「家屋破壊」が行われたのです。

ここにすむパレスチナ人やベドウィンの方々には、殆どが農民なのです。彼ら農民の「住んでいた土地」への思いは大変強く、かれらのイスラエルに対する抵抗は、留まることを知りません。

これからの連帯と再会を約束して、私達は、日暮れのルート90でラシッド氏らとお別れしました。

さて、明日はいよいよガザ地区への入域です。既に、現地との活動計画が交換され、明朝8:30の国連UNRWAの車両を待つのみとなりました。

10月24日（木）第5日目

今日からいよいよガザ地区への入域です。朝8:30に国連UNRWAから迎えに来たUNマークのワゴン車で、エルサレムから一路エレッツへ車を走らせます。およそ1時間半後、ガザ地区唯一の出入り口であるエレッツ検問所に到着いたしました。

世界一厳しいと言われているイスラエルのエレッツ検問所。噂通りに入植者もサングラスに自動小銃を下げて、パレスチナ人への監視を怠りません。

イスラエル側のチェックを済ませ、ガザ内に入るとパレスチナ自治政府とハマス政権の双方の入国審査を終えて名実ともに「ガザ入域」を果たすので



イスラエル軍と入植者から激しい攻撃を受けているヨルダン渓谷のパレスチナ人の先頭に立つヨルダン渓谷連帯委員会 (Jordan Valley Solidarity) のラシッド氏 (向かって左から3人目)、清末先生の古くからの友人でもある。



ガザ地区への入り口であるエレッツ検問所、イスラエル軍と入植者の厳しいチェックが待っている。もう何度も通過しているが心の休まることはない。

す。

国連車でガザ地区内へ進むと、以前にもましてラバによる農作物などの輸送が増えているかの様でした。これも、ガザのガソリン不足が続いているためでもあるです。

11:00過ぎに、国連UNRWAのフィールドオフィスで到着し、医療局で今回の活動計画の打ち合わせを行いました。

患者さんの診療を行う「医療チーム」と子供支援活動を行う「教育チーム」の二本立てで進めることにしました。2カ所の診療所と4カ所の中学校でのバレーボールと絵画教室の準備がされていました。

一方GAZA 2で準備していた「リハビリトレーニング」については、当初1日だったのが、現地の希望で2日間に増加してしまいました。2019年3月から国境で行われてきた「帰還のための大行進」での死傷者が著しく増加し、リハビリテーションへの期待がたかまっていることの反映なのかもしれません。また、そのほかにも理学療法士の手技についての演題も依頼されました。それについては、これから準備しなければなりません。

午後2時から、UNRWAが運営する男子小学校で、ガザ地区の体育教師向けのバレーボール講習会が開かれました。参加した体育教師はもとより、ビーチバレーのナショナルチームのメンバーなども参加しました。細川先生による「バレーボールの指導方法」の座学に続いて、屋外バレーボールコートでの実技では多くの参加者の笑顔が印象的でした。

最後には高校先生も参加するほど大きな盛り上がりを示しました。

これから、次回のバレーボールの講習会の第一歩になったのです。(細川佳之報告を参照)

宿舎に帰宅後は、坂東さんが手今日のカレーライスとサラダで舌鼓をうって、本日の反省と明日への活動への意欲を燃やして一日を終えること

ができました。

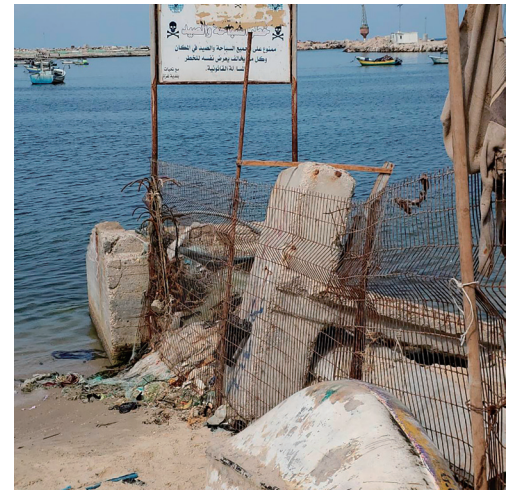
10月25日(金) 第6日目

今日は、金曜日でイスラム世界では安息日なのです。とはいってもお昼から様々な所で結婚式を挙げています。

今日の活動の第一歩は、エルワッフアリハビリ病院(規模:100床、医師18人、リハビリ技師70人)のバスマン事務局長さんとお会いして、ガザに持ち込んだ抗生剤を中心とした薬剤を渡しました。大変喜んでいましたが、この病院を取り巻く環境は厳しいものがありました。何といたっても設備の不備の改善や薬剤購入が資金不足のため進まないこと。しかし、物事を前向きに考えていることが随所に見られました。外国からの医療機器がイスラエルの「封鎖」のため入手できません。「それでは自分自身で創る。これがガザ地区での操業にもつながる」との認識なのですが、これまでのガザ地区で病院を運営する苦しさを吐露しながらも前に進もうとする姿に感銘を受けました。

ところでこのエルワッフアリハビリ病院は、イスラミック大学医学部の教育病院のため、随時25名の医学生が研修しています。今回の支援活動に参加している北大医学部6年目の宮岡さんを是非ガザ地区の医学生との交流を当初からの目標にあげてらずガザの若者たちは、外の若者との交流を渴望しています。これが実現し今後の活動の見通しをつけることに全力を尽くします。この意義のある活動を後押ししたいものです。

その後、ガザ港へ……。その目的の一つは、ガザ港に排泄される汚染水の排泄口を確認することです。有刺鉄線に個々まれた港の端を歩き、その排泄口にまでたどり着き記録を取ろうとすると、ハマス兵士が近づいてきて「写真撮影の禁止」を付けられました。残念!!!!(実は、すでにスマホに収めていた後でしたが……)



燃料不足のガザでは、汚水処理されずに海岸に悪臭を伴って流し出される。ガザの港にもその排水溝が口を開けている。



汚染水が流し込まれるガザの港で、ゴミも浮かぶ汚染された海の中で遊ばざるを得ないのだ。



ガザの港での「路上臨時診療所」。日本から医療ボランティア団体が来ていると聞きつけて、左手に先天性形成異常の8歳と家族がやってきた。



リームさん(後列右から3人目)宅での昼食のひと時。家族みんなが集まり私達を迎えてくれる。リームさんは、現在カナダへ留学中。

港の中で、少年たちが泳いだり、魚を採ったり・・・汚染水が放出されている港の中です！！

その後、港を散策していると小さな男の子（8才）が駆け寄ってきました。よく診ると左手の形成異常があるのです。同時に、左上肢の分娩麻痺も合併していました。

後ほど、連絡を取り再会を約して分かれたのですが、私達を取り囲む人々が多く、いわば「路上臨時診療所」の様でした。

北海道大学工学部に留学していたリームさんから昼食のお誘いを受け、メンバーみんなでリーム宅を訪問。毎回の活動時に一度はお世話になるのですが、家族全員で私達をもてなす姿は、相手を大切にするパレスチナ人の姿を代表しているかのようでした。

今日の金曜日は、ガザ地区とイスラエルの国境で「帰還のため大行進」(GMR)が開催される日なのです。今回の活動で、機会を見て参加メンバーにその様子を見せたいと考えていました。これまで300人以上の死者と30,000人の負傷者を出しているイスラエルによるパレスチナ人への大弾圧な

のです。

2018年7月に世界保健機関(WHO)からの要請でガザ地区南部のあるヨーロッパガザ病院へ手術支援に来た時にお世話になったタクシー運転手のアハドさんに相談してみました。

返事は「了解」です。安全に安全にです！！！！彼が交渉した2台のタクシーに分乗してガザ市東部にあるデモへ出掛かました。様子は、昨年来た時よりも平穩になっていましたが、ポリスラインよりも分離壁に近づくと危険なため「安全圏」にいましたが、そこからでもイスラエル兵のスナイパーが隠れている小さな丘が明瞭に確認できるのです。

このデモは、「自らの土地を取り返す」闘いです。高齢者も子供も孫たちも手をつないで行進に参加しているのも大きな特徴です。土地を守るために「世代を継いで」かかっているものなのです。デモ現場を遠くから見てみると、昨年前線で参加したときのことか思い出されるのです。私の耳元を乾いた銃撃音がすり抜けたり、私の前の若者が左顔面を撃たれ後方で待機している救急車に運び込まれたり、催涙ガスに巻き込まれて呼吸困難陥ったり・・・。と後ろを見ると、アハド

さんの住まいの近所の高齢者たちが10数人車座を組んでお茶を飲みながら語らっているのです。こうした、生活に根差しているのもこのデモの特徴の様でした。ちなみに、前線には食べものを販売する屋台もできています。

さて、デモも終盤になり帰宅の途に就きました。娘さんを連れて私たちの案内をしてくれたアハドさんに心から感謝です。彼は、このガザ地区で私達「奉仕団」の強力なサポーターになっていただけるようです。今回の活動の大きな成果でした。

さて、明日は診療と子供支援活動が待っているのです。

10月26日(土) 第7日目

本日は、ガザ地区南部にあるハンユニスを中心に、医療活動と子供支援活動を展開しました。

医療活動はUNRWAハンユニス診療所です。小児整形外科関係の脳性麻痺や筋肉疾患の子供、腰椎由来の左下肢麻痺の男性(手術適応と判断)、右下肢CRPS(複合性局所性疼痛症候群)などの治療困難例についてコンサルタントを求められました。私にとってなかなか難しい患者さんたちですが、



ガザ市東部のイスラエルとガザ地区の国境のデモ現場。

一帯先の国境のイスラエル側には、トーチカ様の小隆起があり、そのぞき窓からイスラエル軍のスナイパーが銃口をパレスチナ人へ向けられている。



北海道立札幌南校生徒から送られたメッセージボード(ガザ地区南部 バニ・ソハイラ女子中学校)

理学療法士さんたちと相談して11月のGAZA②に再診をお願いする患者さんもいました。

ここハンユニス地区には、診療所が3つありますがリハビリ施設のあるのはこのみなのです。上記のような患者さんがここに集まらざるを得ません。私は、11月3日に始まるGAZA②でリハビリ技師研修会の講師をしますが、その研修会を通してガザ地区のリハビリ技術の向上が期待されています。

一方、同行している医学部6年目の優秀な宮岡慎一さんも一緒に神経所見などを観察し臨床研修の一環としていました。

GAZA地区はどこでもそうですが、診療所の周りには多くの人々が集まり、出店を中心とした「市場」が作られています。ここも例外ではありません。診療所の一步外に出ると多くの子供や若者が私たちの周りを取り囲み、写真撮影や会話を求めてくるのです。既に12年間も「完全封鎖」が敷かれているガザ地区では、ガザ地区以外に出てみたいという「渴望」が、少しでも外部の人間と接したいという行動に駆り立てるのかもしれません。

別のバレーボールと絵画教室組の4人は、ハンユニスにあるパニ・ソハイラ女子中学校で、バレーボール講習と絵画教室が開かれました。ここでは、学校を上げての歓迎ぶりでした。札幌から持参した、札幌南校の生徒たちが学校祭で取り組んだ「メッセージポスター」の展示を行いこれからの生徒同

士の交流の始まりにしたいと考えています。

診療終了後、子供支援活動組と合流し午後からの会場に向けて国連車両を走らせました。昼食は、移動中の車中で持参したおにぎりをみんなでほおぼり、エネルギーを蓄えたのです。やはり、清末女史が腕を振るったおにぎりは、私達にとって不思議な力を蓄えてくれるようです。「おにぎり」は、今後の活動に活かすことができるものと思われま

そうして移動しているうちに、午後からの会場であるデルバラ市へ・・・最初に、デルバラ男子中学校で「絵画教室」を開催しました。10人の男子中学生が思いおもいの絵画を作成。やはり多いのは、ガザ地区の封鎖の現実や、自由へ熱望などが中心となります。GAZA地区では、現在の中学生は物心がついたころからイスラエルによる「封鎖」が続いているのです。そうした中で、「封鎖への反対」、「パレスチナに自由を！！」の気持ちがこうした絵画に表現されるのです。このガザ地区で描かれた貴重な「絵」、つまり、イスラエルによる完全封鎖で世界に向かって表現する権利を奪われているガザの少年たちの「心」を日本に持ち帰り、絵画展などを通してより多くの人々に伝えて行きたいと思

次は、同じデルバラ市にあるマグハジ女子中学です。激しい降雨のため、屋内の教室で基本練習を行いました。

一方、札幌国際情報高校の生徒が作成した「メッセージポスター」を学校



男子中学校で行われた絵画教室での作品。その中で、「パレスチナへ自由を」「私達に救いの手を」の言葉が私の胸をついた。

の図書室に展示させていただきました。これも札幌南校と同様にこれからの生徒間の交流に発展できるように取り組みを進めたいと思っています。

本日のすべての活動が終了し、雨のガザ地区を宿舎へ向かい北上してゆきます。

18:00から ガザJICAのサハール所長と北海道大学に留学経験のあるリームさんとお茶を飲みながら旧友を深め、他のメンバーからはガザの医療・教育状況へのQ&Aがつづいていました。

今夜はGAZA①の最後の夜、明後日帰国する清末女史と坂東さんを囲んで、様々な会話に花が咲きました。楽しく、信頼し合える仲間同士の6人です。何時間あっても話が尽きませんが・・・

明日は、午前中の診療とお昼からエレッツ検問所を通過してエルサレムに向かうのです。

10月27日（土）第8日目



北海道立国際情報高校生徒から送られたメッセージボード（ガザ地区中部マグハジ女子中学）



2018年にイスラエルの空爆に会い診療活動を中断させられたブルジ難民キャンプ診療所での診療活動。職員の皆さんが待ちに待っていたとのこと。

本日は、「GAZA①」の最終日です。

ここでは、医療支援活動とともにバレーボールと「絵画教室」による子供支援活動が重点的に行われました。今日実施しなければならないのは、ブルジ難民キャンプでの診療です。というのは、2008年11月の第11次支援活動施行中にイスラエルからのミサイル攻撃が行われ、当時の診療を断念せざるを得なかった場所なのです。従って、1年ぶりの念願が叶った診療でした。23名の患者さんが私たちのコンサルタントを待っていました。

特に多かったのは、GAZA~イスラエル国境で繰り返されている「帰還のための大行進」(GMR)により受傷された方々です。

イスラエル軍(IDF)が使用する「蝶形銃弾」で、右下腿を撃ち抜かれた若者は、3度の手術を繰り返しましたが、このクリニックのリハビリ部門の力で起立・歩行が可能となっています。

また、IDFにより左股関節から下腹



ガザ地区をサルにあたり、GAZA②に再訪することを約束してパレスチナのシンボルの横で。



イスラエル兵に左下腿を撃ち抜かれた後、切断は免れたがその機能は大きく失われた。

部を撃ち抜かれ、股関節の破壊と同時に大腸、総腸骨動静脈の損傷を受けた男性は、救急医療による初期治療を受けた後、エジプトまで運ばれて、人工股関節置換術も含めて腹部の根治手術を受けていたのです。しかし、命は助かったものの失業状態となり明日からの生活に大きな不安を抱えての生活なのです。

パレスチナでは、男性が経済的にもその家の中心=大黒柱です。その役割を果たすことができない焦燥感は、私達が想像する以上の深刻さがあります。こうした面(戦傷被害)に由来する「ガザの貧困化」も住民の絶望に拍車をかけるのかもしれませんが。

更に、下肢だけでなく右上腕から胸部を撃ち抜かれ若者は、幸い右肺の1/2を切除して一命をとどめたのでした。もちろん右上肢のマヒは遺残したままなのです。当然、それまでの大工さんの仕事を断念せざるを得ず、失業~貧困のサイクルに落とし込まれるのです。

これらの診療を終了し、ガザ地区からの「出城」のため北部のエレッツ検問所へ……。

13:00の「出城」を予定し、検問所のパレスチナ側で昼食のおにぎりをみんなでお張りしました。こうした「検問所でのにおにぎり」昼食をするのも初めてなのですが……。ここでも、清末女史、坂東さん、宮岡さんが作ったおにぎりの美味しさを忘れることができません。におにぎりは、私達に不思議な「力」をもたらしてくれるので



イスラエル兵に下腹部から股関節も撃ち抜かれ、エジプトまで送られて助命された青年。この日は、地元のジャーナリストが取材を兼ねて診療現場を訪ねてきた。

す。次回からは、心身共に栄養をもたらすこの「おにぎり作戦」は、「奉仕団」の活動に定式化したものだと思います。

こうしてエネルギーを蓄えた後、イスラエル側の検問へ……。ここでは通過するのに2時間近くを要しました。それだけ「念入り？」にすべての持ち物、リュックはもとよりトランクケースの隅々までごったまぜにするまでのチェックです。包装物には錐用の刃物を一刺しでした。いつも温和な表情の清末女史の目が点になって怒りを示し、アラビア語での抗議が起こるのも無理のない状態なのです。

その後、UN車両で17:30にエルサレムの宿舎に到着……。

19:00から、明日一足先に帰国する清末女史と坂東さんへのささやかな送別会を行いました。それぞれが、お二人への感想を述べあいました。清末女史の「絵画教室」をさらに発展させ、子供たちの描く絵の感想、帰国後の展示会、日本の子供達との「絵画交流」などこれからも息の長い、発展性のある活動を展開したいと考えています。

また、現役ジャーナリストの坂東さんの参加は、活動の記録をする方法、住民・患者さん・そのご家族、医療・教育関係者への何気ない聞き取りなど、学ばなければならないことがたくさんありました。帰国後の「まとめ」が今から楽しみでなりません。同時に、中東の経験豊かな坂東さんが入れてくれた毎朝の熱いお茶が私たちの心も豊かににし、活動開始へのウォーミ

ングアップにもなりました。

明日は、8時からの朝食とし、みんなでお二人をお送りいたします。

本当にお疲れさまでした……北海道で See you again!!!!

10月28日（月）第9日目

本日は、最初から参加してた清末女士と坂東さんが帰国する日なのです。お二人の参加で、前日記載したように、私達の活動が大きく前進したことは言うまでもありません。

昨日のささやかな送別会に続いて、今朝の見送りを残る4人で行いました。若干遅れ気味の小型乗り合いバスに乗り込み、お二人はテルアビブのベングリオン空港へ向かいました。

本日から西岸・東エルサレムにあるシュアファット難民キャンプでの診療です。キャンプまでの途中、イスラエルによる移動検問所が私たちの乗車してる公共乗り合いバスを止めて乗客のチェックを始めました……今日は、やけに警察が多く検問の厳しさを実感しながらのシュファット難民キャンプ行きとなりました。

23人の患者さんが引切り無しに受診してくるのです。医学生の宮岡さんの力を借りながら、一人一人丁寧な診療が続きます。時には札幌から持参した薬を処方しながらです。

ここでも肩こりや腰痛、膝痛が大いなのですが、今回は扁平足による足底部

痛の方も診られました。アーチサポートで対応するのですが、患者さんのいつも履いている靴そのものに問題ありの様でした。

その後、難民キャンプ内での往診です。ゆっくりの移動中にもかかわらず、お店屋さんからパンの寄付を受けることができました。私達への「歓迎」と勝手に判断し、いただいたパンをかじりながら患者さん宅へ……

病歴を聞き取り、全身の神経学的所見を取ると、頸部脊髄症が疑われ手術を含めた治療法が必要と考えられました。明日、頸椎MRIを持参してクリニックを受診するようにいたしました。

夕方、エルサレム旧市街への帰路、イスラエル警察の近くにあるペテロ門に差し掛かるとイスラエル警察を取り囲むようにパレスチナ人の群衆が集まっていました。小高い石の上でカメラのシャッターを切り出すと、一人に少年が武装警察に蹴られ、叩かれて警察署に連行されて行きました。私の近くにいた女子高生に車の成り行きを尋ねると「警官をブッシュしただけで、少年がイスラエル警察に射殺されたの……」と教えてくれました。イスラエルの軍事支配が続く西岸・東エルサレムでは、こうした射殺＝殺人、連行・拘束＝逮捕～刑務所が日常茶飯事となっているのです。しかも私の目の前でその射殺と連行・拘束が起き

ていたのです。胸を締め付けられそうにその場に立ち尽くすしかありませんでした。

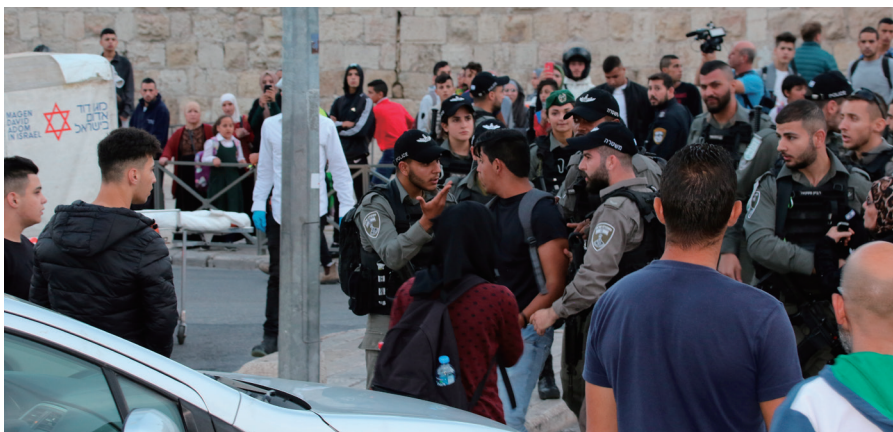
一日も早い「ガザ封鎖解除」とともに「西岸からのイスラエルの撤退」を強く、強く主張せざるを得ませんでした。

一方、旧市街地に向けてダマスカス門付近を歩いていると、パレスチナ人を監視しているイスラエル兵が突然監視所から降りてきた、通りかかったパレスチナの青年を監視所内へ連れ込み、尋問を始めたのです。ガラス越しに見えたその青年の表情には、「無念さ」がにじんでいました。西岸の軍事占領を続けるイスラエルが、パレスチナ人を幼少時から「イスラエルに反抗しない」ことを頭の隅々に刷り込まれているのです。

夕食は、明日、帰国する細川先生、米林嶺さんの送別会を兼ねて行われました。ここでも、今回の総括と来年への展望が強く語られました。

10月29日（火）第10日目

今日は、バレーボールによるスポーツプロジェクトで大活躍した細川佳之氏と財政担当をはじめ様々な組織活動をしっかりやりぬいた米林嶺さんが帰国する日です。宮岡さんとともに4人でエルサレム最後の朝食をともにいたしました。お二人とも誠実で自分も持てる力を十分発揮していただき、すで



イスラエルの軍事支配下のエルサレム。軍や警察に歯向かうと容易に射殺される。その現場で抗議するパレスチナ青年は、この後警察署内へ「連行」されたのだ。



突然イスラエル兵に検問所内へ連れ込まれ、尋問を行われるパレスチナ青年。抵抗すると拘束～逮捕が待っている。彼の顔には、何も抗議できない無念さがにじむ。

に次回への抱負を語るまでになっていきます。楽しみでなりません。

急に寂しくなりますが札幌を出発する看護師の井上智美さんが到着するまで2日間、宮岡さんと二人で乗り切る予定です。

8:15に宮岡さんと二人で、207番の公共バスに乗ってシュファット難民キャンプへ。いつものように難民キャンプの入り口には、イスラエル兵と煙の煤に汚れた検問所の監視塔が我々を出迎えてくれました。

今日は、キャンプ内のチャリタブルセンター（福祉協会）での無料検診活動です。そこには昨年9月札幌で研修した理学療法士のラビベさんも参加されました。診療への意気込みと意思疎通がスムーズで患者さんが次々とやってきます。その中でも、本日はセカンドオピニオンを求めてくる方もいたり、親子や姉妹で受診されたりする方もいます。

今年で7年目になシュファット難民キャンプでの診療活動は、キャンプ住民の中で一定の実績が作られてきたのかもしれませんが。昨年受診後の再診患者さんがその後の経過を報告しにやってくることもありました。

9:00から始まった今日の診療は13:00まで続けられました。

13:30からの昼食では、パレスチナのおもてなし料理である「マックルーバ」がふるまわれました。というのは、本日「北海道パレスチナ医療奉仕団」と al-Quds charitable society and Special Education（エルサレム慈善協会）との間で「友好協力協定」を締結する記念の日なのです。

「医療奉仕団」が2010年7月12日に設立後、2011年2月からパレスチナの視察・医療活動を開始しました。最初は、西岸にあるジェリコにあるUNRWAの診療所で開始されました。そこで、副所長をされていたサリム先生との協力関係で現在の東エルサレム・シュファット難民キャンプに医療

支援活動の拠点を移したのが2013年。それから7年間、「パレスチナ人でも行きたがらない」劣悪な環境の中に置かれているこの難民キャンプでの活動を継続してきましたのです。

その結節点のひとつが本日行われた「友好協力協定」締結ありました。これを今後の活動の発展の礎として、協定の主旨と精神を大切に誠実に育ててゆきたいと思います。

同時に、それを根本的に保障するために、イスラエルによる西岸市区での「入植活動」反対、「GAZAの封鎖反対」、「パレスチナに自由を」のスローガンを高く掲げて、日本国内の諸課題と結び付けて取り組みを強化したいと思います。

皆様のご支援とご教示を心からお願いいたします。

10月30（水）第11日目

本日も朝から、シュファット難民キャンプの慈善協会で無料検診活動になりました。

昨日同様に、理学療法士のラビベさん、宮岡さんとともに、24名の患者さんが診察に訪れました。本日も腰痛や膝痛の患者さんが多数を占め運動療法を指導したり、専門医に紹介状を書いたり・・・この難民キャンプでも整形外科＝運動器疾患の要望が多いことが考えられました。（内科や小児科の患者さんは、これまでもサリム先生が診療を続けていつのです）



「北海道パレスチナ医療奉仕団」と「シュファット難民キャンプ福祉センター」の間で、「友好協力協定」を締結。猫塚団長とサリム理事長。

下肢のストレッチングの方法を教えたり、「腰痛体操」に実技を直接指導したり、患者さんとの距離の近かった一日です。

診療が佳境に入ったころ、難民キャンプの「女性センター」の方々が、果物による造形（芸術）作品を完成させて私たちにプレゼントしてくれました。困難な生活の中でも難民の方々の私達への温かい思いやりに胸が熱くなるのを感じるのでした。

さて、本日は午後から「ベドウイン」集落での無料検診の予定でしたが、移動手段の都合がつかず11月8日前後に延期になりました。突然の「休暇」が与えられて・・・この時間を活用して、これまで走ってきた活動のまとめ作業をすることができました。

そもそも今回の課題をすべてやるには、3週間の活動では無理かもしれません。

次回からは、期間の延長を検討しなければならないかもしれません。

シュファット難民キャンプを出る検問所では、お年寄りとお子を除くすべてのパレスチナ人が公共バスを下ろされて、外部で一人一人イスラエル兵のチェックを受けるのです。

これは、若いころから「パレスチナ人はイスラエルの許可がないと何もできないのだ!!!」という占領者の論理をパレスチナ人の頭の中に刷り込むアパルトヘイト政策の一環なのです。

私は、今回はイスラエル兵に一時パ



難民キャンプの女性の心づくしの作品です。私も宮岡さんも疲れが一変にとんでしまいました、シュクラン（ありがとう）!!!!です。

スポーツを持って行かれ、一瞬「どっき」とさせられましたがそれ以上の追求はなく、事なきを得たのです。

明日から、いよいよ井上智美さんの合流と、京都大学からイスラエルに留学中の学生さんが私たちの活動に予定されています。明日の午後には4人体制となるのです。楽しみです!!!

10月31日(木) 第12日目

第13次支援活動の行程もすでに半分を超えてしまいました。当初掲げた目標は、十分に達成しているのですが、何せ期間が短いのが欠点です。やらなければならないことが次々に湯水のように湧いてくるのですから……。

本日は、海外での活動経験が豊かな井上智美看護師さんが合流する日です。午前中に設定している難民キャンプでの診療も11:00までとしました。それでも再診の患者さん、合併疾患がいくつもある患者さんなどゆっくり丁寧な診察が続きました。中には、神経内科の専門医へ……。

この難民キャンプで熱傷や火傷を負うと、軽症でなければここの診療所だけでは対処できないのが実情です。どうしてもイスラエルの病院へ受診しなければなりません。そこで問題となるのは、遠距離であり、検問所の通過、そして何より高額な医療費を要求されることなのです。貧困に苦しむ難民の方々にとっては死活問題に進行することすらあるのです。そこで、クリニックのアフメド看護師さんが、1~3度ぐらいまでの熱傷であれば、キャンプのクリニックで治せないものか……北海道での研修も含めて相談にのってほしいとの申し出がありました。私は、難民の生活背景まで考慮する姿勢に全く共感しました。帰国後の課題として位置付けたいと考えました。

先日シュファット難民キャンプ内の幼稚園で行った「絵画プロジェクト」の作品をいただきにクリニックへ立ち寄

りました。するとクリニック営繕工事を担当する男性が私を待っていました。昨日、右肘上腕骨外顆炎(テニス肘)のため夜間痛までも訴えていました。サリム先生の依頼もあり同部に注射を施しました。昨日から痛みがなくなり、そのお礼にやってきたのです。その男性は、あまりにも嬉しかったのか私の右のホッペにチュウをしてまで感謝の意を表していました。しかし、私達の活動は、あくまでも「支援」の範囲内ですので、こうした具体的な処置はこれからも慎重に対処しなければならないことを確認しました。

12時過ぎ、宿舎に戻ると間もなく井上さんが到着しました。ウズベキスタン経由の旅は長かったようですが、いつもの素敵な笑顔が彼女の疲れの少なさを物語っていました。さすが国際経験が豊かな井上さんです、こうした長距離の移動にもあまり堪えないのかもしれない。

15時過ぎ、京都大学学生のSさんも宿舎に到着です。京都大学岡真理教授の教え子さんと、この春からイスラエルのハイファの大学に留学しているとのことでした。これから11月3日まで私達と行動を共にしてゆく若い仲間です。また、ちょっとだけ活動の輪が広がった気がしています。3年前には、同じ京都大学学生の岡崎さんも私たちの活動に現地参加をしてくれたのです。京大岡真理先生とその教え子さんとの「繋がり」に何かしらの「縁」を感じているところです。

今日の夕食は、井上さん、Sさんの

ささやかな歓迎会を兼ねて宮岡さんが準備してくれました。

さて、明日は、国際平和デモでイスラエルが設置する分離壁と「入植地」に反対するピリン村行です。あの写真家・造形芸術家のハイサム氏と車いすのラニーさんにお会いできるのが楽しみでなりません。いつものように彼らから大きなエネルギーをいただこうと思っています!!!!

11月1日(金) 第13日目

7:45からの朝食時に、JVC・山村さんの訪問を受けました。山村さんには、エルサレムではもとよりGAZA地区では、安全で力が出る活動を確保するための宿泊先に件でも大変お世話になりました。ここで、最近のパレスチナ人の状況もお聞きして、私達の後半の活動内容の参考とさせていただきます。

本日は、毎回の支援活動で必ず訪問するピリン村行です。金曜日の今日は、イスラムの休日のため、午前中の街は商店も閉まり静寂です。東エルサレムのバスターミナル~カランディア検問所~ラマラ~ピリン村へと順調に進んで1.5~2時間の行程です。

1年ぶりのピリン村・ハイサム宅です。11時前後の到着を伝えていたので、ハイサム氏本人が出迎えてくれました。彼は、このピリン村を拠点にイスラエル軍の軍事占領と入植地活動の実態とは反対運動を丁寧に温かく伝えている報道映像写真家です。また、毎



ハイサムさんは、いつも私達をあたたかく迎えてくれます。

週金曜日にピリン村で行われている「国際平和行進」にも積極的にかかわっており、国際的にも賞をいただきパレスチナを代表する写真・造形家の一人です。

最近、それに加えてワイヤーを用いた造形芸術で作品を創り出しているのです。

ハイサム宅で、荷を下ろして最近の様子を聞きました。

- 1) この頃の国際平和行進では、イスラエル軍からの攻撃が減少していること。
- 2) パレスチナは、歴史的に世界の中心（欧州、アフリカ、アジアの結節地）であり、イスラエルが建国されたのは70年ちょっと前。そのパレスチナのほぼ中心のあるのがここピリン村なのだ。（これぐらい自信過剰？になってもいいのかも）
- 3) イスラエルは、パレスチナから様々な収奪をしている。その典型が「水」である。

ここピリン村の地下を流れる水を侵入してきた入植地でくみ上げて、それをパレスチナ人に高額で売りつける。貧しいパレスチナ人はますます貧しくなるのは当然なのだ。

- 4) アメリカとイスラエルは、お金儲けのために世界のあちこちで戦争を行っている。戦争をビジネス化しているのが実態だ。

また、ワイヤーを用いた造形作品について……

これは、送電線の交換時に出てくる「廃材」を使用している。また、これらの作品の一つ一つに彼の思いと意味のあることを説明してくれたのです。私は、彼にこの作品のいくつかを日本に持ち帰り市民の皆様を紹介・展示することを提案しました。しかし、彼は、自己の思いの詰まったオブジェをやはり手元に置いておきたい希望が強いのでした。

私は、そうした芸術家としてのハイサム氏の心を十分理解できないまま前

記のような提案をしたことを恥じざるを得ませんでした。

帰りは、「車いすのラニー」さんの奥様が運転する車で、西岸で一番嚴重といわれているカランディア検問所まで送っていただくことになりました。同乗したラニーさんは、2000年9月に始まった第2次インテファーダで、外傷性脳障害、胸髄損傷、肺損傷から生還した若者なのです。毎年訪れる私達「医療奉仕団」を心待ちにしてくれます。

明日は、ガリコ美恵子さん共に、ヘブロンへ「入植地」反対運動の若きリーダーであるイッサアムロ氏にお会いできる日なのです……早めの出発です!!!

11月2日（土）第14日目

本日は、京都大学からイスラエル・ハイファ大学へ留学中のSさんとともに、ガリコ美恵子さんの案内で西岸南部の町、ヘブロンへ……。

エルサレムからベツレヘムで公共バスを乗り換えて、ヘブロンへ向かいました。

その目的の第一は、ヘブロンで強力な持続的な反入植地運動を進めているイッサアムロ氏にお会いするためなのです。彼は、Youth Against Settlement (YAS) のリーダーとして多数の逮捕歴にもかかわらず、闘い続けているのです。私は、毎年一度、ここへ

ブロンを音連れて、最近のヘブロンの状況を伺うことにしています。実は、イッサ氏は昨日までアメリカ・ワシントンへ米国ユダヤ人団体の招待で渡米し、15回の講演会を行ってきたとのことでした。彼の表情、身のこなし方など、今年4月にお会いしたときに比べて断然よくなって売



写真家のハイサムさんは、現在造形作家の才能を磨いています。それぞれの作品がパレスチナ人の苦しみ、悲しみを表現していた。



長い間苦しめられていたラニーさんですが、褥瘡からも解放されていました。しかし、ピリン村の苦しみは、何も解決されていません。



半年ぶりに会ったYASのリーダーであるイッサ氏（向かって右から2人目）です。アメリカでの講演活動から帰国したばかりでした。会うたびにイッサからは、しなやかで強靱な「不屈」さを学ばされます。

りではありませんか!!! 嬉しさのあまり、お互いにハグし合っってホッペをスリスリ(ズリズリ)するありさまです。

彼の言によれば、ヘブロンはヨルダン川渓谷と同じような状況で、それがなお一層悪化しているとのことでした。私達も、今回の活動にあたり、ヨルダン川渓谷におけるイスラエルによる「入植地建設=侵略的国家建設」「パレスチナ人の家屋破壊」「人の命である水の収奪」などを問題としてきました。

そのことが、最初にイッサ氏の口をついたことは、やはりパレスチナにおけるイスラエルの侵略的軍事支配の実態は、まさに構造的であることを裏付けることになっていました。



「入植者が通る」という理由で閉鎖され、無人と化しているヘブロン・シュハダ通り。イスラエルによるパレスチナ人への分断と差別が進んでいる。



ヘブロン・旧市街で、通りの2階から武装したイスラエルへの監視が続く。

その後、以前はにぎやかだったシュハダ通りを通り、旧市街を抜けて帰路につきました。旧市街でもイスラエル人の入植者が建物の2階以上を占拠し、それを守るためにイスラエル軍が

分離壁や監視塔を作り、そこからパレスチナ人を分断・監視しているのです。

建物の屋上からは、重装備のイスラエル兵が、眼下を歩くパレスチナ人や私達を見下して監視しているのです。

帰り道、エルサレムへ向かう公共バスが検問所で止められ、若いパレスチナ人が一度バスを下ろされて、一人一人IDカードの提示を強要されているのは、シュファト難民キャンプと同じ光景でした。人権を無視したこうした「弾圧的行為」は、いずれパレスチナ人からの大変な反撃を受けることが来ると自信を深めたものです。

昨日夕方からのイスラエルによるガザ空爆で、1人と死者と4人の負傷者を出しました。

昨年11月の「第11次支援活動」では、ガザへのミサイル攻撃で、支援活動が中止させられたのを思い出しました。安全第一を大前提に、どうしたら現地ガザの人々のために、今度こそは活動予定を遂行できるかということ、明日の朝までに「奉仕団」の在札本部に残るメンバーと連絡を取りながら決断しなければなりません。ヘブロンへの往復の車中ではそのことを考え抜いて帰ってきました。

さて、明日は今期、2度目のGAZA行「GAZA②」です。北海道に残る「団」のメンバーの意思とガザの

現地と状況を考えわせ、今回は 猫塚団長と井上智美看護師さんの2名で活動することになりました。宮岡さんは、この間エルサレムで待機していただくことにいたしました。

現在医学部6年目の宮岡さんには、「イスラエルのガザ空爆が起きかねないこと」「万が一、医師国家試験を控えている宮岡さんが負傷でもすれば、今後の人生を左右しかねないこと」を説明し納得していただきました。私も宮岡さんも難しい判断を迫られましたが、彼はこの苦渋の選択を受け入れてくれました。私は宮岡さんの決断に心から感謝いたしました。

これからも活動の安全性を確保するとともに、現地ガザの人々の心に寄り添い、希望を持っていただけるような活動を全力で行なうことを誓ったのです。

11月3日(日) 第15日目

本日からいよいよ「第13次医療・こども支援活動」での2回目のガザ行です。

医学生の宮岡さんと京都大学留学生のSさんに見送られて、井上さんと二人でガザを目指しました。エレッツ検問所では、軽機関銃を下げて私達を監視する入植者がやや多い程度でした。

既報の様であった2日前のガザ空爆以降、イスラエルからの攻撃はなく、身の回りガザ内を車で走った限りでは、緊迫した様子はありません。現地の何人かに聞くとたまにガザ側からのロケット弾があるそうです。考えてみれば、イスラエルが12年間も「完全封鎖」していること自体が「ロケット弾攻撃」の理由になのかかもしれません。

直ちに明日からの予定を確認。

4日、5日のAM 8:30~12:00 リハビリ講義、

4日16:00~ JICA日本語教室、17:30~夕食、18:30~ICRC(国際赤十字委員会)、赤新月社病院、日本人医師との会食

5日午後、イスラミック大学看護学部訪問・懇談

6日午前中、リマールクリニックでの診療、午後からガザ出域となりました。こうした予定が立つのも同行する井上さんの積極的な姿勢によるも

のです。

また、この半日の活動でも「奉仕団」と相談しなければならぬ来年に向けた課題と展望が出ています。これまでの活動に加えて、例えば、ガザの看護師さんとの連携、ミュージックプロジェクトの実施（望まれています）、ガザのポストカードの注文・利用、などなどこれからも出そうですが……。

明日からの活動で、更にこれらが鮮明になるようです。

11月4日（月）第16日目

本日は、「GAZA②」の二日目です。市街地、いつも通りの平穏です。地元のニュースによれば、イスラエルの無人機ドローンがハマス軍事部門のLMG（軽機関銃）で撃たれただけで、イスラエル国防軍（IDF）のツイッターでもこの2日間、ガザ攻撃の記事も出していない状況です。

8:30宿舎を出発し、ガザ市郊外のビーチキャンプの海岸通りを北上し、ジャバリヤ難民キャンプ近くにある「UNRWA LOCAL STAFF CLUB」へ。

途中通過した「ビーチキャンプ」は、その名の通り海岸沿いにある難民キャンプです。漁業を主な生業としていましたが、13年前のガザ封鎖以来、漁獲量が激減し貧困化の大変著しいところなのです。毎年の経年的観察でも徐々に「荒れ果ててゆく」感が否めません。

それでも路上ではこじんまりと魚やカニが売られていました。

一方、その海岸線を北に向かって視線を移すと、その先の遠くにはイスラエル最大の工業都市アシュケロンにある工場の高い煙突が目に入ります。夜になると、闇夜になるガザ地区と朝まで明るく照らされているアシュケロンの対比が現在の「ガザ地区の完全封鎖」の現状を表すことになりなのです。

猫塚団長による ガザ地区の理学療法士の皆様に「運動療法」に関する講義を開催。井上看護師さんが実技を担当。



今回は、この「CLUB」で開催されている理学療法士のみなさんへの講義に私が招かれました。17名の方々に、約2時間パワポや動画を用いての講義です。

内容は、リハビリテーションにおける「運動療法の重要性」「筋膜リリースについて」「体幹安定性について」「脊髄損傷の早期リハビリについて」などでした。また、井上さんの紹介で「ラジオ体操第一（英語版）」も上映、最後に私達「奉仕団」が独自に作成した「腰痛体操」DVD（アラビア語版でインストラクターは、井上智美さん）を紹介し、リハビリテーションにおける運動療法と早期リハの大切さを語る事ができました。

明日の講義は、参加者からの要望もあり実技を交えての講習となりそうです。

さて、

12年間の「完全封鎖」が続くガザでは、地区外へ出ようとする若者たちが増えていると聞いていました。その実態をガザの若者達に聴取すると……

聞くとところによれば、ここ数年で4万人の若者がガザから出て行ったという説があります。そのほとんどがエジプトとの国境であるガザ地区南部のラファからなのです。

ガザから「出城」するには、様々なハードルがあるのです。検問所の開閉、必要資金の調達、当局との関係性、「出城」後の受け入れなどなど……です。万が一「出城」できたとしても、エジプトの首都カイロまで行くまでに何か所もの「検問所」があり、そこでは何度も何度も荷物の検閲と尋問が繰り返されるのです。何とかカイロにたどり着いても、エジプトへの入国とはなりません。ここまでこれたのは、「単なるエジプト通過許可」を得ただけなのですからカイロから先は何の保証もありません。

運よくカイロ空港から空路で飛びたつ人、アレキサンドリアから海路でトルコ・イタリア・ヨーロッパ方面を目指す人々など……海を渡るパレスチナ難民の方々には海難という大変な危険が待ち構えおり、死亡する確率も低くありません。

こうした、カイロの先が見えないパレスチナ人は、ガザ地区に戻らざるを得ません。しかし、そこにも大変な苦しみがあります。病人も含めて、容赦なく「監獄」様のシャトルバスに載せられ、検問所で何時間、何日も待たされ……彼らの中には、それを「地獄」と形容する人もいるぐらいなのです。これを彼らは「第2のナクバ」と呼んでいるのです。

そもそも12年間以上もイスラエルに



「第二のナクバ」について語るアマールさん（向かって右から二人目）。その実態は、涙を誘うものでした。



ガザ地区北部のベイトハヌーン難民キャンプ・診療所の理学療法士。講義で再会を喜び合った。



ガザの理学療法士は若く、何事にも積極的に聞いてくる。私達が数年前に配布した「腰痛体操」のDVDもすでに勉強していた。

「完全封鎖」され、そこから脱出を試みようとして「実行」しても、そこには成功の確率は、極々わずかしかありません。その多くは、ガザ地区での将来に「絶望」し、「新たな世界」求めているガザの若者たちに、さらなる「地獄の困難」が強いられているのです。

こう語る若者の目には、うっすら涙が浮かんでいました。私は、その目から当人のつらさよりもやり場のない怒りと悔しさを強く感じ取ることができました。

こうしてみると、ガザの住民たちにとって、彼らの人権や将来の夢や希望はどこにあるのか！！

私達に求められている課題は、第一にイスラエルによる「ガザの完全封鎖」を終らせることです。西岸地区の入植地建設反対とともに一時も早く勝ち取らなければなりません。

その後、国際赤十字委員会（ICRC）から派遣されているお二人の日本人医師も同席され、日本語が使われるガザでの情報交換に、心がなごやむ時間を共有することができました。

11月5日（月）第17日目

本日は、5:00AM前に起床・・・リハビリ講演への緊張か??? これをついでに洗顔～洗濯を・・・（自宅では、洗濯はせずに済みますが、こ

こでは洗濯機の使用法から教えてもらい、小さいものは手でもみ洗いです。

（・・・学生時代の野球部の合宿を思い出しながら）一方では、今日の講義内容の方法のバージョンアップを頭で再構成しながらのガザの朝のひと時です。

今日は、リハビリ講演の2日目です。

8:00AM 宿舎に迎えに来てくれた国連UNRWAからのランドクルザーに乗ってビーチキャンプの海岸通りを北上し昨日と同じ会場へ・・・ところが昨年の医療支援活動で、この運転手さんの腰痛の息子さんを私が診療したのです。その後、私達に教えてもらった「腰痛体操」でよくなったことを話してくれました。（ちょっと安心しました）

本日の講演会は、参加者も昨日と異なるメンバー17名です。会場に着くと、これまでに診療活動したガザ内のクリニックの理学療法士（PT）さんから挨拶の声がかかるのでした。ブルジ難民キャンプのPTは、先週のお別れの写真で私の陰になっていたのもう一度ツーショットの依頼です。また、昨年の支援活動の最終日に診療したベイトハヌーン難民化キャンプ診療所のPTは、最も熱心で自ら大学で学んできた運動学と運動療法を結び付けて議論してきました。日本では、中学校の保健体育で学ぶ「トレーニングの

6原則」などは、参加者には新鮮だったようです。

講義内容は昨日と同様でしたが、ストレッチ運動などは、参加者と一緒に体を動かして運動方法を理解していただく方法に変更しました。井上さんも参加者とともに汗をにじませて運動のコツをプレゼンすることができました。

今回は、国連UNRWA医療局からの依頼で始まったガザ地区での「リハビリ講習会」での2日間の講演でした。テーマの設定や事前準備などがガザ地区と札幌での交渉が十分ではありませんでした。この点は、大いに反省しこれからは生かすことができると思います。

一方、リハビリにおける「運動療法」を強調した今回の講習会では、ガザ地区でも運動療法の効果を実感するとの発言が少なからずの理学療法士の口から語られ始めました。

私達が、ガザ地区で診療を始めたのは2013年11月です。その時の印象は、肥満の多さに愕然とした思いがありました。あまりにも腰痛・膝痛・肩こりが多いこと、生活の中での運動が少ないこと、またそれが糖尿病、高血圧、高脂血症などの生活習慣病（パレスチナではNCD）の基礎的原因になっているとの予想でした。

早速運動療法を提案してみたのです

が、その時の理学療法士さんの反応は、あまり芳しくなく「どうせ教えても、やらないよ」「生活習慣を変えなければだめでしょう」などと否定的な反応が少なくありませんでした。

2014年から診療場面で、腰痛患者さんへは「腰痛体操」を根気強く教えてきました。2015年には、「医療奉仕団」として「腰痛体操」のDVDを作成し、ガザ地区多くの診療所・病院に配布活動を行いました。昨日の講習会でも参会者の中から「そのDVDをみました」との発言がありました。

今回、国連UNRWAの主催で行われた「リハビリ講習会」の中のひとつに「運動療法」設定されました。

今回、講習の中でガザの理学療法士さんからの声を聞くと運動療法の効果があるとの意見が寄せられていました。2013年11月の時点で「否定的意見」をいただいてから6年目の今、ガザ地区の中に確実に運動療法の拡がりを見ることができるのです。また、日常生活の中でもできるだけ歩行やサイクリングの習慣をつける風潮も出てきているようです。

地元の人からも指摘されていますが、最近海岸沿いにジョギングやウォーキングをする人が増えているとのこと。また、街中を移動していると結構トレーニングジムが眼に入るようになりました。

こうした「運動」を医療の中に取り入れ、また生活様式の改善につなげて

ることができているのなら、私達がそのほんの一部でも貢献できたのかもしれない。今回確認できた年余にわたる活動の成果を北海道に持ち帰り、「医療奉仕団」とその活動を支えていただいている支援者の皆様に謙虚に報告したいと思うのです。

11月6日（月）第18日目

今日は、GAZA2（13次活動、第2回目のガザ入り）が最終日です。午前中にイスラミック大学看護学部の訪問とリマール難民キャンプクリニックでの診療の予定です。

ところが宿舎の出発予定時刻に、マジドさん、カリマンさん姉妹が車で私達を迎えに来てくれたのです。お二人とも私たちの現地ガザでの活動を支えてくれる方々です。彼女たちは、銀行周りや大学までの移動のお世話をかって出てくれたのです。姉のマジドさんは、若い女性実業家です。12年以上も続く封鎖下のガザで安価な建設ブロックを作る会社を立ち上げビジネス分野でこれからも活躍する方です。来年は、米国ハーバード大学修士へ留学予定です。また、妹のカリマンさんは、自ら「Piece of Palestine」というハンドメイド作品のお店を営んでいるのです。この元気でユーモアセンスの豊かな若いお二人の登場だったのです。

彼女たちの紹介で、二人の出身大

学であるイスラミック大学（学生数28,000人）の護学部へ……。学部の前では、学部長のアシュラフ医師、国際公衆衛生教授のユセフ医師をはじめ幹部の方々が出迎えてくれました。彼らとの懇談では、短時間でしたがイスラミック大学・看護学部と札幌の看護学生の交換留学のお話で熱を帯びました。やはりガザの大学は、パレスチナ・ガザ地区以外との交流を渴望しているのを強く感じました。こうした提案を札幌に持ち帰り、何とか実現できる方法を見つけないといけません。次回ガザに来る時には、十分な時間を確保して、学生たちとの懇談など一歩ずつ「交換留学」に向けて準備を重ねたいと思います。その後、大学内見学をしましたが、とにかく学生が多いのです。1学年に17,000人の学生が学んでいるのです。キャンパスのいたるところで本を開いている学生だらけです。（試験がいるからでは…とマジドさんが言っていました）

その後、急いで診療予定のリマールクリニックへ……。11時近くになり、見た患者さんも2名程度で、11:30にはガザ出域のためエレッツ検問所へ出発せざるを得ませんでした。

ところがそこに、ガザ地区でも一人の若い女性実業家であるアマルさんが、パレスチナ・ガザの特別スイーツであるクナーファを作って届けてくれたのです。

2日前にアマルさんとガザの若者の

絶望感が広がる中でも、自ら起業して未来を拓こうとするガザ地区の女性たち（向かって右がマジドさん左がカリマンさん）



ガザ地区、イスラミック大学看護学部を訪問。北海道との看護学生の交換留学の可能性を議論した。



実情をお聞きしたときに、「第二のナクバ・ニューナクバ」という言葉で、現在のガザの現状を語り始めました。その続きの話をこの言葉を繋いでいただきました。

1948年のナクバ（大災厄）は、パレスチナの地にイスラエルの侵略的建国が強行されて、約70万人がパレスチナ難民として今日のパレスチナ・イスラエル問題が起こされてしまったのです。現在のガザの事態は、それとは異なり12年間という長期間にわたり「2度目の難民化」行われ、しかも難民の行き先は、遠くヨーロッパ方面なのです。彼女は、この特徴を「long time & long distance（長期間、長距離）」とい語っていました。これこそが第二のナクバ＝ニューナクバ（新しい大災厄）なのです。

次回には、さらなる討論時間の確保を約束してクリニックを後にし、UNRWAの美紀さんのお見送りで国連UNRWAカーでエレッツ検問所向かったのです。また何度でもやってくることを約束して・・・イスラエルによる「ガザ封鎖」が解除されるその日まで私たちのガザ行は、バージョンアップしながらです・・・これを胸にエレッツ検問所からエルサレムへと向かったのです。

11月7日（月）第19日目

本日は、ヨルダン川西岸での活動の最終日です。

いつものように、ゲバラの看板のあるお店で水を入手後路線バスに乗ってシュファット難民キャンプへ・・・いつものように、イスラエル軍の検問所と焼け焦げた「監視塔」が私達を出迎えてくれました。

クリニックによりサリム先生と本日の予定を打ち合わせた後、福祉センターでの診察を開始しました。

腰痛・膝痛に患者さんのほかに、脳性麻痺の赤ちゃんが二人受診しました。診断後、ラビベ理学療法士により、丁寧にホームリハビリプログラム



パレスチナの子供たちと一緒に散歩する井上看護師さん。

が始動されていました。

腰痛の患者さんも含めて、総じて「運動療法」が取り入れられています。昨日のガザ地区と同じように、生活習慣病の予防と治療も含めて「運動」の提案が現場に受け入れられているのではないのでしょうか。シュファット難民キャンプでの取り組みも7年目を迎えている今日、運動療法の導入と生活の中に運動を取り入れることが着実に前進しているのかもしれませんが。

午後からは、待望のエルサレム郊外にあるベドウイン集落への無料検診へ向かいました。

砂漠の遊牧民といわれるベドウインは、西岸地区では、イスラエルの入植地建設とそれを結ぶ「専用道路」により、遊牧地域が分断され十分な遊牧などできません。その結果、じりじりとした貧困化がこれらの集落を直撃しているのです。子供たちの中には、住居が岩場にもかかわらず裸足で走り回る子供が見られました。

また、1年前に診察した両側外反足の6歳の子供は、それが改善し、治療との判断を下すことができました。

11月8日（月）第20日目

今日は、「第13次パレスチナ医療・こども支援活動」の番外編で、パレスチナの歴史を学ぶために、サリム先生とエルサレムの西方、20KmにあるAyalon Canada Parkへ行きました。先生の友人であるモハンマドさんと一

緒です。しかも、昼食にはごちそうのマックルーバを公園で作るというピクニックの小旅行です。

ここアヤロンカナダ公園は、地中海とエルサレムを結ぶ高台の丘陵地帯にあり、ローマ時代に起源をもちその後パレスチナ人が居住していたところです。公園からは、遠くテルアブ方面が見えて心が晴れるところです。一方、軍事的にはパレスチナの要衝となるとのこと。

パレスチナ人やユダヤ人の家族がピクニックにやってきて、互いに挨拶交わす平和的な雰囲気のあるところです。もちろん、公園内ではイスラエル兵による監視・検問などはありませんでした。

1948年にイスラエルの侵略的建国で、ナクバ（大災厄）が起こされ、ここでは3つの村の1,500近い家が破壊され7,000～10,000人が故郷を追われ難民となりました。その中でエルサレムまで逃れた人々がいました。更に1967年の中東戦争を経て、東エルサレムにいた難民の一部がシュファット難民キャンプへたどり着きました。こうした歴史を見ると私達が東エルサレムで活動の拠点としているシュファット難民キャンプに住む人々のルーツのひとつなのです。そこで行われたイスラエル軍による多くのパレスチナ人の虐殺や村の暴力的破壊が語られました。

イスラエルに接収されたこの公園の隣にはイスラエル軍の訓練場が作ら



「アヤロンカナダ公園」から見たパレスチナの大地。1947年にイスラエルの侵略的建国がイスラエル～パレスチナ問題の原点であることがサリム先生から具体的に語られた。

れ、時々通行禁止の標識があり、イスラエルの軍事支配という現実に戻されるのでした。

11月9日（月）第21日目

「第13次支援活動」を終えて、いよいよ最後の「関門」であるテルアビブ・ベングリオン空港でのセキュリティを如何に通過できるかが大きな仕事です。1 昨年「第9次支援活動」では、別室に呼ばれしっかりと「聴取・検閲」を受けたからです。

イスラエルのセキュリティでは、とにかく議論や講義などができません。というのは、「いやならもうイスラエルに来るな」と言わなければかりに入国拒否の線をパスポートに書き込まれるからです。もし、イスラエルからの入国拒否となれば、私達の活動にとって大きな打撃を受けることになるので慎重にならざるを得ません。

今次の活動の前半6名の出国では、さしたる問題はありませんでした。しかし今回は・・・

私と宮岡さんの二人が7:00AMに予約していたセルビスで空港へ向かいました。8:00AM過ぎには空港へ到着。直ちにセキュリティチェックに列に並びました。

最初に猫塚が係官に呼ばれて、チェックが始まりました。

「一人か、連れがいるのか」・・・一人います。英語がうまく話せませ

ん。
「目的は、何か」・・・・・・・・・・観光です。

その後、宮岡君と交代を命じられる。

「あなたは、何をしていますか」・・・・・・・・医学生です。

「若いあなたと高齢の仲間がどうして一緒なの」・・・・あの医師の病院で研修している

（「猫塚が医師であることを言ってもいいよ」と猫塚がささやく）

そのほか、ガザには行っていないのか等々聞かれる）・・・・詳しくは宮岡談へ・・・

上司の男性が尋問に加わる

その後、日本語通訳の若い男性が呼ばれ猫塚の再尋問・・・通訳が友好的（父が日本の小児科医）

「パレスチナで何をしていたのですか」・・・・患者さんの治療です。

「あなたの仕事は何ですか」・・・・整形外科医です。

「どこでやっていたのですか」・・・・UNRWAの診療所です。

「どうしてUNRWAなのですか」・・・・医療局長が友人です。

その後、10時にここに戻り制服を着た職員に声をかけるように言われその場を解放されたのです。

この時パスポート返却してくれたので、セキュリティを通ったとも思った

が油断せず

時間の経過を待ったのでした。

10時に再度来ると先ほどの通訳者がいて、セキュリティ係官を呼んでくれ優先的にチェックインと手荷物検査場へと案内された。

手荷物検査では、同じことを3回、レントゲンによりボディチェックを3回施行。

勿論、パレスチナで預かったもの、武器の有無を一応聴取されました。

以上が「第13次医療・こども支援活動」の記録でした。



第13次活動報告 『子ども支援（スポーツ交流）』

細川 佳之

子ども支援の活動の一つとしてスポーツ（バレーボール）交流を行うようになった。

北海道パレスチナ医療奉仕団は3年前から、子ども支援の活動の一つとしてスポーツ（バレーボール）交流を行うようになった。今回は3回目として活動を行い、今後の活動の方向がより明らかになってきたと感じている。

【今回の活動の大きな成果】

（1）体育教師対象の講習会

今回の活動では、活動期間の問題で昨年よりも子どもたちとの直接の活動は少なくなりましたが、体育教師たちとの交流が大きな成果だったと言える。ガザ市の男子学校の体育教師が10数名集まり、講習会を行うことができた。この取り組みは、昨年第11次活動で実現をめざしていて叶わなかったことだったので、今回実現できたことは非常に嬉しいことだった。

はじめに座学を行い、その後実技指導を行ったのだが、教師たち自身ごとにかく体を動かしたい、バレーボールを楽しみたいという思いを強く持っているということに非常に心を動かされ

た。室内で行われた座学では、私が用意していたパワーポイントを利用したのだが、語学の先生が通訳してくれた。私は、英語を話すことはほとんどできないのだが、講義で使うスライドは英語で示した。これを、その語学の先生がアラビア語に訳して先生方に伝えてくれた。その際、今回一緒に支援活動に参加した清末先生にもお手伝いいただいた。大変ありがたかった。また、UNRWA教育省体育スーパーバイザーのカリッド・アルカン氏には、実技面でも大変お世話になった。座学の中では子どもたちの練習の様子を撮影した動画を見てもらった。これは、私が現在指導している札幌の中学生たちに協力してもらって撮影したものである。これとあわせて基本的なパスなどの簡単な実技も行った。約30分の座学の後、外のコートで実技指導を行った。

ところで、ガザ地区の学校には、屋内体育館がない。校庭はコンクリートで作られており、そこにバレーボール

やバスケットボールのコートが作られている。バレーボール用の支柱が立てられ、バレーボールのネットも張ることができる。バスケットボール用の移動式のゴールもあり、そこで体育の授業が行われている。これは、男子学校でも女子学校でも同様である。

さて、実技では座学で示した練習方法に沿って活動してもらった。（その内容は、後ろに資料として、掲載してある。）基本的なパスは省略して、ネットを挟んだプレーから始めた。子どもたちの技能の問題はあるが、できるだけゲームに近い形で練習したいという思いからこのような方法をとった。参加してくれた先生方はさすがに体育教師だけあって、メニューをどんどんこなしていき、早くゲームをしたいという要望が強かった。子どもたちへの指導を忘れて？、プレーをしていく先生方を見ていて、私はとても嬉しい気持ちになった。先生たち自らが楽しみながら、子どもたちにもスポーツの楽しみを伝えることは何事にも代えがたいことだと思うからである。時間があっという間に過ぎ、最後に6対6のゲームをほんの少ししかできなかったが、とても充実した取り組みができたと思っている。参加した先生方や協力してくれた方々に心から感謝したい。

（2）子どもたちへの指導

今回は、2つの女子学校で指導する

バレー講習会



体育教師たち



ことができた。どちらもガザ地区である。一つは、ガザ地区南部ハンユニスのパニスハイラ女子学校である。二つ目は、中部地区のデルバラにあるマージー女子学校である。

① パニー-スハイラ女子学校

パニー-スハイラ女子学校に到着すると、大変な歓迎を受けた。軍楽隊のような感じで整列した子どもたちから赤いバラをもらい、校庭へ。そこで、国歌が流れ、子どもたちが歌う。そして、なんと「君が代」まで。ちょっと戸惑ってしまった。さらに、歓迎の音楽とダンス。そうして、ようやくバレーボール交流。生徒は、20名。前日の講習会で説明したウォーミングアップから。教育省の体育スーパーバイザーのカリッド・アルカン（42歳元パレスチナナショナルチームメンバー、現ビーチバレーメンバー）さんも手伝ってくれた。ボールを使ったウォーミングアップのあと、オーバーパスとアンダーパスをペアを作って、練習。それを使って、ネット越しのボールを2人で2回目で返球。そして、3回目で返球。これができれば、2対2のミニゲームができるが、残念ながらタイムアップ。二人で協力してボールをつないで相手コートに戻すということは、いくつかの技術が必要になる。今回は、普通のボールを使ってやってみたが、最初はソフトバレーボールを使ってやってみた方がよかったかもし

れないと感じた。ここまでで、活動終了し、記念撮影。

② マージー女子学校

二か所目の学校は、難民キャンプ内のマージー女子学校。ここでは、降り出した雨のため、人数を16名に絞って教室で行うことになった。狭い場所での練習でやれることは限定されたが、子どもたちはとても楽しそうに取り組んでくれた。この学校での活動も、スーパーバイザーのカリッドさんが一緒に指導してくれた。オーバーパスを膝立ちで練習するなど、練習方法も工夫してくれた。一つの練習に対する色々なバリエーションを用意しておく必要があると思った。そうした指導方法についての手引きを用意して、先生たちが利用できるようにしたい。ここも30分程度で終了したが、「中途半端に終わってしまい、残念だった。バレーボールで大切なのは、協力して、続けることだ。」と話して、終了。記念撮影をして、校長室へ。途中、子どもたちが待っていてくれて、サイン攻めにあった。嬉しいことだ。ひらかなで書いてあげた。私たちは、彼女たちにとってめずらしい外国人なのだ。

(3) 全体を通して

今回のバレーボール交流を通して感じたことは次のようなことだった。

毎日子どもたちと接している教師たちの活動が大切なのは言うまでもない

ことである。私たちは、子どもたちが日常的にスポーツを通して、精神的にも肉体的にも健やかに成長することを願っている。したがって、そのために教師たちの活動を支援することは非常に大切な取り組みである。そのことを今回初めて実現できたことをとても嬉しく思っている。

もちろん子どもたちと直接接する事は、今後も続けたいし、それ自体が非常に大切な活動であると考えている。閉じ込められた空間で自由を奪われている子どもたちのことを多くの人たちが知っていることを実感してもらうためには、我々外国人が子どもたちと直接触れ合うことが大切なのだと思う。

【今後の課題として】

1. ガザ地区での取り組み

(1) 学校教育との連携

ガザ地区での活動をさらに広げるために、先生たちとの連携が絶対に必要である。先生向けの講習会を継続させたい。今回は男子学校の男性の先生方の講習となったが、女子学校の先生方、女性の先生方への講習会も実現させたい。もちろん直接子どもたちとの交流は継続させたい。可能なら一つの学校で複数回の交流ができればと良いと思っている。同時に、男子学校の子どもたちとの交流も行いたい。

パニスハイラ女子学校でのバレー講習会





マージー女子学校

(2) スポーツ団体との連携・協力

『パレスチナバレーボール連盟』との協力も行っていきたい。(今回非常にお世話になった教育省の体育スーパーバイザーのカリッド・アルカン氏は元ナショナルチームのメンバーということである。息子さんが現ナショナルチームメンバーだということも誇らしげに話してくれた。) ガザ地区には、3つほど屋内体育館があると聞いたが、施設の見学も含めてナショナルチームの練習なども見学できたらと思う。ただ、ナショナルチームは男性だけのようで、女性のチームが作られる予定はないのだろうか。こうしたことも大いに興味のあるところである。

今回JVCの山村さんとお話したときに次のようなことを聞いた。13歳くらいの少女が、それまで続けていたスポーツジムをやめてしまう(やめさせられる)ケースが多いのだそうだ。その理由は、周りからの偏見が心配だからというのだ。要するに、女性がスポーツを行うということに対する偏見からなのだ。女性がスポーツを行うことへの偏見はイスラム世界では少しずつ少なくなってきているということはあるようだが、まだまだ一般的ではない。たとえば適切かは別として、サウジアラビアでは2018年になってようやくサッカーの試合を女性が観戦することが認められた。イランでは、昨年10月に40年ぶりにワールドカップ予選の

観戦が認められた。(どちらも男性の試合の観戦であるが)スポーツ観戦でさえこのような状況なのだ。女性がスポーツをするということはさらに厳しい状況であることは容易に想像できる。こうした状況だからこそ、ガザ地区の女子学校でスポーツ交流を行う意義は大きいと言えるだろう。3年前にガザ市内で女子ソフトボールリーグが発足し、試合が行われたということが報道されたが、非常に感動的だった。こうした動きとの連携・交流も必要である。

2. 西岸地区での取り組み

(1) シュファット難民キャンプの取り組み

シュファットキャンプの診療所の向

シュファット体育館



かいに完成予定の屋内体育館を使ってのスポーツ交流も非常に楽しみである。サリム先生に案内していただいたトレーニングジムはキャンプ内にあるとても立派な施設である。低価格で利用できるため、毎日200~300人ほどの利用者があるそうだ。その建物の4F部分に体育館ができるのだ。健康な生活を維持するためには食生活が重要だが、同時にスポーツも大きな意味を持つ。こうした動きに、私たちがどのように協力できるかを探っていきたい。しかし、イスラエルによる妨害も大いに心配である。現に、キャンプ内に住民有志が建設したプールが破壊される事件が起きている。様々な理由をこじつけての妨害行為である。移動の自由を奪うだけでなく、キャンプ内での活動すら妨害する暴挙を絶対に許すことはできない。

(2) 西岸地区での交流

ヨルダン川西岸地区での交流は、まだ手の付けられていないところである。私は、今回初めて西岸地区へ行く事が出来たのだが、イスラエルによる入植活動が今後一層進められることでシュファットキャンプと同様に、どんどん自由が奪われることになる。肥沃な土地と命の水を奪う行為は、絶対に許すことはできない。さらに、現在進められているイスラエルによる「西岸

地区併合計画」が実行されたなら、一層深刻な状況に置かれることになる。そうした状況に置かれた子どもたちとの交流はまだ行われていない。ぜひ、子ども支援・スポーツ交流を行ってきたい。

私が札幌へ戻った日に、猫塚先生たちがエルサレム郊外のペドウィンの集落を診療で訪れたときに、子どもたちから「今年はバレーボールはできないのか」という声が聞かれたという話を後日聞いた。とても嬉しかった。しかし、同時に非常に申し訳ない気持ちになった。そして、前年私も訪れたこの集落で出会った子どもたちの姿が鮮明に浮かび上がった。今回の私の活動期間が10日間と短いことで活動が制限されてしまったからなのだが、これは私の仕事から仕方のないこととはいえ、次回は何かもう少し時間を確保して、あの子たちとぜひとも再会したいと強く思った。

【今回の活動での経験から】

今回の活動で今まで経験しなかったことがいくつかあるが、その一つを紹介したい。それは、活動を終え、米林さんと2人でイスラエルを出国するためにエルサレムからテルアビブ・ベングリオン空港へ向かう時のことだった。エルサレムのホテルで予約していたイスラエルのセルビスが来ない。しばらく待ってやってきたのだが、1人しか乗れないと言う。そこで少し高くなるが、アラブ系の運転手のタクシーで空港をめざした。空港近くになって検問所を通過しようとしたところで、止められた。荷物をすべて持って検問ゲート横の建物の中に。アラブ系運転手のタクシーということでのことらしい。空港と同じ荷物検査（X線透過による検査）とボディチェック。このまま留め置かれるのではないかと心配したが、なんとかパスできた。若く頼もしい米林さんと2人であったことが私には救いだった。とはいえ、どう考えても単なる嫌がらせである。私にとっ



西岸入植地

て3回目にして初めての経験だった。

イスラエル国内でパレスチナの人々は日常的にこうした理不尽な目に遭っているのだ。現在、世界中で新型コロナウイルスのために移動の自由が制限されている。しかし、ガザ地区の人々は10年以上にわたって移動の自由を奪われている。比較できるものではないが、私たちもガザの人たちの日常を多少なりとも追体験していることになる。私たちは人間に与えられている想像力を働かせてみる必要がある。そのためにも現実を知ることが必要である。世界中の多くの人たちがパレスチナの人たちが置かれている日常を知らないのだから、ほんの少しでもこうした状況を直接体験した私の責任として、現状を伝えることが求められていると強く感じた。

【最後に】

私の活動として、私たちが経験してきたことをもっと多くの人たちに知ってもらいたい活動が大切なことである。現在、私は札幌市内の私立高校に非常勤講師として勤務している。今まで札幌の市立中学校で勤務してきて、中学生に活動の報告をしてきた。これは今後とも続けていく予定だが、高校生にも広げていきたい。昨年11月に高校の授業の中で、少し報告を行ったのだが、とても熱心に聞いてくれた。しかも、次の授業のときには生徒の中から中村先

生の事件が話題になった。生徒の視野が少し広がったと実感している。また、別の生徒が授業後に「ガザでは部活はあるのか」と質問してきた。もちろんそういうものはないと答えたところ、「それはだめだ」と口にしていった。自分の生活と比較して、その違いを知ったことでパレスチナの子どもたちが置かれている現実を自らに引き寄せて感じるができるのだ。少しでも多くの高校生に、現実を伝え、考えてもらえるようにしたいと思っている。

昨年中学校で担任していた生徒の母親が、「自分の子どもの担任の先生がこういう活動をしてくれて、それを子どもに教えてくれることに、本当に感謝しています。」と話してくれた。こうした言葉に、励まされて、今後とも活動を継続させていきたいと思っている。

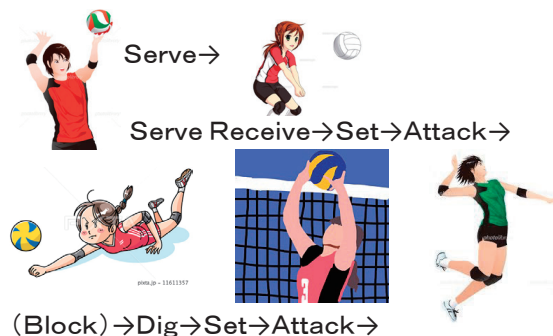
今回の支援活動で3回目のパレスチナ訪問となりました。本当に私の人生の中で非常に大切な経験をさせていただいていると実感しています。これも支援のお陰です。今後も多くの方々の支援を無駄にしないように真摯な態度で活動に臨みたいと思います。今後とも皆様方のご支援よろしく申し上げます。

PLAYING VOLLEYBALL TOGETHER

Hokkaido Medical Seavice
for Palestine in Japan
Yoshiyuki HOSOKAWA

①

Composition of a volleyball game



④

Our purpose of Spots Activity

- We wish to release at the children's heart from Closed space.
- A sport is good for release of spirit (heart).

②

The thing important by volleyball (sport)

A sense of distance of a ball and a body is important.

Warm-up using a ball for it.

⑤

The reason that we chose volleyball

- Play around a net.
So there is no contact play.
- Volleyball is a Group sport.
- Connect a ball with a heart by the power of the group.

③

Warm-up using a ball

- ① The ball thrown by oneself, the place where I approached a floor as much as possible is grasped.
Change by 6 times for 1 person.
- ② The moment I hit a floor, a given ball is grasped.
Change by 6 times for 1 person.

⑥

③

The ball thrown up from the rear is grasped in front of the body.

Change by 6 times for 1 person.

④

The ball thrown from the front is grasped behind the body.

Change by 6 times for 1 person.

⑦

Practice using a ball

- Overhand pass
- Forearm pass (Underhand pass)

⑩

⑤

It's the fellow in left and right and it's thrown from the back

and it's grasped in front of the body.

⑥

It's thrown on the rear under the thigh and it's grasped in front of the body.

⑧

Overhand pass

- The shape of the overhand pass
A small triangle is made with a thumb and the index finger. And a big triangle is made with an elbow and a hand.
A ball is flicked using 10 fingers.



⑪

⑦

I line up line one and relay handing of a ball.

(1)

A body is twisted and delivered in the rear.

(2)

It's delivered to the back between the foot.

(3)

The upper part of the body is warped and delivered.

⑨

① Practice of 1 to 1



② Practice of 1 to 2

※C is a cover of B



③ Practice of 2 to 2

※This practice is performed around a net.



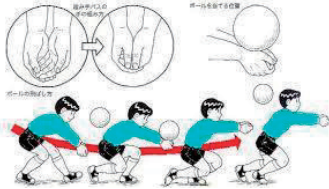
④ Practice of 3 to 3



⑫

Forearm pass(Underhand Pass)

- The play to dispose of a low ball and a strong (speed) ball.
- Both hands are made, an elbow is increased and it's turned to a target.



13

A Pass Game

- A Pass Game of 2to2 using over&under Pass
- A Pass Game of 3to3

15

- The ball which has crossed a net is connected and returned with 2 people.

It's important to cooperate and continue it.

14

It ends with this.
Please hand the pleasure of the volleyball down to children.
Thank you very much.

16



北海道パレスチナ医療奉仕団 第13次支援活動報告

井上 智美

パレスチナの街は懐かしさと嬉しさを感じる半面、何も変わっていない=何も解決していない

今回の第13次活動は私にとって3回目・4年ぶりとなるものでした。4年ぶりに訪れたパレスチナの街は何も変わっていないなという懐かしさと嬉しさを感じる半面、何も変わっていない=何も解決していないという実態もあり、感慨深くさせられるものでした。

今回は奉仕団として3部に分かれてそれぞれ訪問・活動をしましたが、私が訪れたのは最終部であり、西岸地区とメインであるガザ地区での活動となりました。

西岸地区では恒例のピリン村での抗議デモに参加しました。4年前に訪れた際と村の景色は変わっていませんでしたが、デモに参加する人々が少なくなっている事に驚きました。10年程前から始まったこのデモはパレスチナで最も古く大規模なもので、多い時には1000人位世界各国から人々が集まることもあったそうです。そのため様々なところから支援が入り、デモの主要メンバーである一部の村人が支援金を自己所有としてしまうなどのトラブルがおきたため、村人の中でデモに対する分裂が起きてしまったそうです。イスラエルの占領からの解放という同じ目標を掲げている仲間同士でさえそういった問題が発生してしまう現状がそこにはありました。

また、西岸地区ではいつもサポートしてくれているシュファット難民キャンプのサリム医師とも再会する事が出来ました。新しくなったクリニックと、チャリタブルセンターでの猫塚医師の診療介助とリハビリ指導などを行

いました。この診療介助は3度目となりますが、腰痛や肩痛・下肢痛を主訴とし、患者層は中年で肥満、特に糖尿病や高血圧などの生活習慣病を基礎とした方が多い状況は変わっていませんでした。パレスチナではイスラエルによる占領で物流が制限されていることや貧困など様々な理由で、良質で栄養に富んだ食料を十分に得ることが困難な状況であるため、安価で食欲や嗜好が満たされる小麦や砂糖、塩分、油分の過剰摂取が日常となっています。それに加えて運動習慣がないため運動不足となってしまうこと、病識の低さや金銭的・宗教的に通院困難となって治療中断してしまう事も多々あるため、生活習慣病の発症・悪化となってしまう、必然的に整形疾患も患うというサイクルになっていました。

診療終了後にサリム医師にベドウィ

ンのある集落に連れて行ってもらい、遊牧民の方々と接する機会も作ってもらいました。前回訪れた集落とは別のところでしたが、人々は温かく迎え入れてくれ、子供たちが集落内を案内してくれました。集落のなかにそれぞれの家がありますが、その中に女性たちがいました。普段女性はあまり外に出る事がないため、初めてみる外国人の私に興味津々で、髪の毛や服、靴、持ち物一つ一つまで新鮮に映ったようでした。ベドウィンの主食である小麦を練って中華鍋のようなもので焼いただけの薄いパン（ナンやクレープみたいなもの）を一緒に作って交流しました。私はこのベドウィンとの交流が大好きで、パレスチナを訪れるたびにサリム医師が案内してくれることに感謝しています。

ガザ地区への入域2日前にイスラエルによる空爆が発生しました。ハマスがロケット弾を撃ち込んできたことによる報復というものでした。そのことによって、エレッツ検問所の閉鎖の是非やガザでの活動の可否、そして自身の安全を第一に考えましたが、現地UNRWAスタッフからのアドバイスや意見を参考に奉仕団のメンバー全員で検



討した結果、当初の予定通りガザ地区へ入ることとしました。ガザ入域前日に空爆は一旦落ち着き、当日は検問所の閉鎖もなく、想像以上にスムーズに入域することができました。西岸地区同様、4年ぶりとなるガザの光景でしたが何も変わっていませんでした。街ではロバが荷物を引いて走り、失業率の高いガザを象徴するようにたくさんの若者が時間を持て余すように集い、子供たちは大きな鞆を持って学校に行き…一見穏やかな光景にも見えますが、15年にも及ぶイスラエルによる封鎖を受け、問題は山積みのままです。

ガザでの活動は、現地理学療法士へのリハビリ講座がメインでした。2日間にわたり運動療法についての講義、日本のラジオ体操の紹介と実践、団で製作した腰痛体操DVDの紹介、質疑応答などが行われました。彼らの知識やリハビリ・運動療法に対する意識は想像以上に高く、講義よりも具体例をもった実践的なものが要求され、質疑応答も活発に行われました。私は講義をする猫塚医師のサポートとしてラジオ体操を実践しましたが、言葉で説明し、身体を動かすのはなかなか難しいもので緊張しました。次回も活動の機会があれば参加者全員でできるような運動療法や、具体例の紹介などができればもっと充実したものになると反省もしました。

また、今回ガザでは時間の関係でクリニックでの診療はほとんどできませんでしたが、施設への再訪や顔見知りのスタッフとの再会もでき、変わらない笑顔で迎え入れてくれたことに感謝でした。ガザにきて毎回感じるもののひとつに人々の笑顔と優しさがあります。活動の空き時間や活動後に、ビーチを散歩したりお土産購入したりしましたが、その際現地の人々は必ず笑顔で、“お茶を飲んでいって、ここに座って、家に遊びに来て”などと話しかけてくれます。言葉が通じなくてもジェスチャーや片言の英語、英語を話

せる人を探してきたりして会話をしようとしてくれることに心の温かさを感じています。

ガザではUNRWAスタッフのサポートや継続した活動により知り合った方たちの紹介などで今回もたくさんの人々と会って話を持ち、今後の活動に活かせるような出来事がありました。その中の一つに、UNRWAスタッフの紹介してくれたカリマンさんという女性がいろいろサポートしてくれ、私の希望でイスラミック大学の看護学部を訪問する機会を作ってくれました。先述したビーチで出会った女性で大学を卒業して検査技師の資格を取ったが就職先がないということを出し、看護師ではどうかと思ったのと、自分の看護師としての知識や技術、経験を活かして何かガザの学生たちにできないかと思ったのがきっかけでした。突然の申し入れにも関わらず、すぐに大学側と調整してくれ面会の機会を作ってくれました。大学の理事長から大学の歴史や概要、学部の紹介などを受け、看護学部長から看護学部の詳細を聞くことができました。奉仕団として今後レクチャーやトレーニング、ワークショップ、交換留学など何かできることがあればやっていきたいと話が盛り上がりました。私自身とても興味がある分野なので、何か小さなことでもできることから取り

組めたらいいなと思っています。

今回第13次支援活動として4年ぶりにパレスチナを訪れ、変わらない現状の良さ・悪さを実感しました。イスラエルによる占領の続くパレスチナの人々にとって、私たちができることは限られており、微々たることかもしれませんが、現地の方々是我们的訪問自体を喜んでくれ、実態を一人でも多くの人に伝えてほしいと訴えています。また、奉仕団のスローガンでもある、継続した訪問・私たちは見捨てない、ということもこれからも発信し続けられるよう日々の活動を続けたいと思っています。

奉仕団を支援して下さる方々や、現地で活動しやすいようサポートして下さる方々、家族や友人、そして奉仕団のみなさまに感謝しております。今年度はCOVID19の影響もあり訪問することはできませんが、次回現地で活動できるまで国内での講演会やイベントなどの活動を継続していこうと思います。



絵で占領を表現するー ガザでの絵画プロジェクトの開始

清末 愛砂（室蘭工業大学大学院准教授）



こういう状況であっても、わたしはけっしてあきらめたりしない

1. あきらめるわけにいかないガザ入域ー法学研究者としての矜持

第11次派遣（2018年11月）および第12次派遣（2019年3月）の際に、イスラエル軍の攻撃により中止・延期せざるを得なかったガザでの絵画プロジェクト（子ども支援プロジェクトのひとつ）を再び試みるために、2019年10月の第13次派遣に参加した。ガザ入域許可を出発前に取得できていたものの、ガザへの入域が必ずしも保障されるわけではない。ひとたびイスラエル軍の爆撃が始まれば、エレツの検問所が閉鎖されることが大いに考えられ、また入域できても、爆撃開始により学校の一時閉鎖もありうるからである。これまでの苦い経験から、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）が調整してくれた事業対象校に到着するまで、半信半疑の気持ちをぬぐうことができなかった。封鎖下のガザでプロジェクトをするということは、こういう不安感や不安定性が常につきまとうことを意味する。

「こういう状況であっても、わたしはけっしてあきらめたりしない」と固く決め、第13次派遣に臨んだ。国際法

違反の封鎖に異議を唱える方法のひとつとして、＜入域＞を追求しようと思ってきたからである。それは、細い針で小さな穴をあけるような作業かもしれぬ。しかし、その継続により穴を少しずつであっても大きくしていきたい。わたしは法学研究者のはしくれとして、封鎖が明らかな国際法違反であることを知っている。そうであるからこそ、違法なものを看過せず、むしろ正々堂々とそれに挑戦することを選びたいと思ってきた。これは、わたしなりの法学研究者としての矜持だ。

初めてガザを訪問した2000年の暮れ、わたしは「羞恥」または「人間であることの恥」とは何かということを何度も自問した（拙書『パレスチナー非暴力で占領に立ち向かう』草の根出版会、2006年、17頁）。あれから20年もの月日が経つが、あのときに自分が出した回答はいまだに変わっていない。それは、人間がかくも残酷な行為ができるということに加え、それらを見られているにもかかわらず、見られていないと思ひ込もうとすることである。悲しいことに、人間としての恥は顧みられるどころか、むしろ以前に増して醜悪なものになっている。ガザ

の人々はそれらを一秒一秒見ているにもかかわらず、ガザの外にいる者たちはそのまなざしに目を向けない。無視という行為には、悪事を看過することも含まれる。無知であることは恥だと言われるが、わたしにとってそれ以上に恥ずかしいのは、法学研究者として知っているのに、知らないふりをする事だ。

2. 鳴り響いた鼓笛隊の演奏と絵画プロジェクトの開始

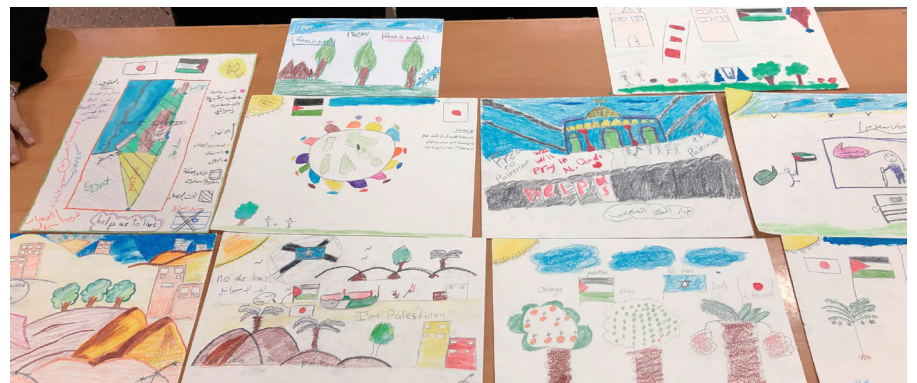
ガザでは、UNNROWA運営のパニ・スヘイラ女子中学校とデイル・アル＝バラ男子中学校で子どもたちに絵を描いてもらう時間を持つことができた。絵の題材は、子どもの目から見た占領の姿である。子どもたちには、占領や封鎖をどのように見ているのか、どのように感じているのかを描いてほしいと頼んだ。パニ・スヘイラ女子中学校に近づくにつれ、緊張で少し息苦しい感覚を覚えたが、学校方向から鼓笛隊の快活な演奏が聴こえてきたときに、急にそれが吹き飛んだ。演奏が私たち派遣団を迎えるための歓迎のパフォーマンスであることを察し、嬉しさがぐっとこみあげてきたからである。タンタカタンタンターン。タンタカタンタンターン。心地よく鳴り響く音を耳にしているうちに、「ようやくここまでこぎつけた」という安堵の気持ちがわいた。

パニ・スヘイラ女子中学校では先に運動場を使って細川先生によるバレーボール教室が行われた。その後に美術

シューファット難民キャンプのUNRWAクリニックでの絵画プロジェクト



デイル・アル＝バラ男子中学校の子どもが描いた作品



の先生や専門家（アーティスト）に手伝ってもらいながら、美術の教室で絵画プロジェクトを開始した。わたしは当初、絵が上手な子どもを学校側で選んでもらうのではなく、レベルにかかわらず絵を描きたい子どもが誰でも参加できるワークショップ的なものを想定していた。しかし、結果的には学校の配慮もあってか、教師の目から見て明らかに絵が上手な子どもが参加していた。

絵画好きな子どもは慣れもあってか、画用紙を配布すると、わたしたちが用意した絵の具やクレヨン等を使って構想にはほとんど時間をかけずに、個々の経験に根差した占領の姿を具体的に描き始めた。真似しあうこともなく、静かに筆やクレヨンを持つ指を動かしていく。そして出来上がった作品は日常生活や感情を実にリアルに描くものであった。その一つひとつに抑圧的な封鎖や爆撃から解放されたいという強い希望や、友人を爆撃で殺害された哀しみ等が表現されていた。絵は人の感性を正直に示す手段のひとつである。

デイル・アル＝バラ男子中学校でも、絵が得意な子どもが絵画プロジェクトに参加してくれた。描き終わるスピードは子どもによって異なるため、早めに一枚目を描き終わった子が続けて二枚目の絵も描いてくれた。パレスチナと日本の友好を示す絵を描いてくれた子どももいた。海外からやってきたわたしたちへのもてなしであるとともに、封鎖された空間であるからこそ、外とのつながりをなんとか見出したい

と考えるガザ住民の気持ちを吐露したものだと思えることもできるだろう。

一枚の作品は、全体として何かを表現するとともに、そのなかの一つひとつのシーンが何らかのメッセージ性を有していることが多々ある。子どもたちの作品には占領や封鎖をアングルに、その双方が凝縮されて描かれていると感じた。ガザでの第一回目の絵画プロジェクトを終えたとき、わたしは子どもたちが絵を通してガザの外にいる人々に訴えようとしたメッセージを必ずや北海道をはじめとする日本で人の目に触れる形で展示したり、報告会の際に参加者に見せたりしなければならぬと強く言い聞かせた。そうでなければ、子どもが自分の時間を使って絵を描いてくれた意味がない。現在は新型コロナウイルス感染拡大問題に瀕しているため、集会や展示会を開くことが困難であるが、オンライン等を使ってできるだけ人の目に触れるようにしたいと考えている。

3. 出張アトリエという発想へ

第13次派遣では、前派遣に続き、東エルサレムのシェーフアット難民キャンプでも絵画プロジェクトを実施することができた。今回の会場は、キャンプ内の私設の幼稚園とUNRWA運営のクリニックのロビーであった。UNRWAのクリニックでは、所長のサリーム先生（医師）の采配でわたしが事前に思い描いていた出張アトリエのような形でプロジェクトを遂行できた。サリーム先生が診察のためにクリニックを訪れた子どもに、優しい顔つ

きで「診察が終わったら、あそこで絵でも描いたら」と声をかけてくださるので、関心を持った子どもや親に促された子どもがロビーに置かれている机のところで、絵の道具を広げて待っているわたしのところにやってきた。

ここでは子どもたちに「描きたいことを自由に描いてごらん」というと、それぞれが少し考えてから、鉛筆で下絵を描き始めた。それを横目で見ながら、わたしも自分の絵を隣で書き始めた。子どもと一緒に絵を描くこと。これこそがわたしがやりたかったことだ。描きたいことを描く作業のなかで、日頃、家族や生活について思っていることが表される。繰り返しになるが、絵は正直な表現方法だからだ。自由に描いてもらったはずの作品にも占領下の抑圧された生活の影響が表れていた。抵抗運動をしているお父さんの影響等からパレスチナの旗を描く男児、ベドウィンとして遊牧生活を続けるなかでテント等を破壊されたり、嫌がらせを受けたりしてきた経験ゆえに、他の子どもが住んでいるような家に住みたいと考える女兒等、子どもたちの日常が描かれていたのである。

最後に今後の絵画プロジェクトの進め方について書いておきたい。基本的には受け入れ先の意向に沿ったやり方で進めるべきだと考えるが、同時に子どものレベルにかかわらず、関心を持った子どもが自由に描いてそのときの感情を吐き出したり、純粋に絵を楽しむでもらったりするためのアットホームな出張アトリエのようなものを開く方法も模索していきたい。

パニ・スヘイラ女子中学校の絵画プロジェクト。出来上がった作品を持って記念撮影



パニ・スヘイラ女子中学校の絵画プロジェクト





「第13次パレスチナ医療・子ども支援活動報告」

米林 嶺

傍観者になる事はイスラエルの味方と主張していると同じ事です。

1. はじめに

今回が私にとっての初めてのパレスチナ医療・子供支援への参加でもあり、初めてのパレスチナでもありました。なぜ私が国際支援への参加に興味を抱いたかという、今から5年前、デンマークに1年間住んだ経験が関係しています。5年前はというと、ちょうど2015年欧州難民危機の年でもあります。紛争や貧困から逃れるため、中東やアフリカでは多くの難民が生まれ、ヨーロッパに流れてきました。私が当時住んでいたデンマークの首都コペンハーゲンにも難民の人々が駅周辺に溢れていました。寒い秋の夜に道端でダンボールを敷いて寝ている家族や、蓋の開いた空き缶を両手に持って物乞いをする若者など多く見ました。私はコペンハーゲン中央駅近くの日本食レストランで働いており、毎日お客さんから頂くチップをポケットに忍ばせては帰宅途中、駅にいた物乞いをする難民の方々へ毎日数百円程度を直接渡していました。今振り返れば、それが難民について考えるようになったきっかけでもあり、微力ながらもあれは最初の国際支援でもあったのかもしれません。帰国後は人々の健康と幸せに携われる仕事に就きたいと思い、北海道にある医療法人の事務職員として働くようになりましたが、コペンハーゲンで感じた無力感は心の中にずっと残っていました。そんな時、北海道パレスチナ医療奉仕団という団体を知り、世界で最も大きな難民グループでもあるパレスチナ難民の人々のため、何か私にも手伝える事はないかと思い、北海道パレスチナ医療

奉仕団のミーティングに顔を出し始めた事がきっかけです。北海道パレスチナ医療奉仕団が主催する報告会・勉強会等の運営に携わる中で、ニュースや人から聞いた話だけではなく、実際に現地へ行き、パレスチナでは今何が起きているのかを自分の目で見て、その経験を活かし日本に住む人々に語り継ぐ事が私に出来る国際支援なのではないかと思い、第13次パレスチナ医療・子供支援への参加を志願しました。このレポートでは、私が現地でのような事を目にし、何を感じたかを記録していきたいと思います。

2. エルサレム（2019年10月22日）

猫塚先生、清末先生、坂東さん、宮岡さん達は事前に前乗りしており、私と細川先生が1日遅れで現地合流する事になっていました。早朝、細川先生と共にイスラエルのテルアビブにあるベングリオン国際空港到着。乗り合いバスでエルサレムにあるホテルで荷物を預け、公共バスを使い猫塚先生等がいるシュファット難民キャンプ（エルサレム内にある難民キャンプ）へ。シュファットキャンプヘルスセンターに到着すると、既に猫塚先生は医学生宮岡さんへ熱心に指導を行いながら、診療を行っていました。患者さんの多くが肥満体型で、腰痛や膝痛などの主訴を理由に受診されていました。その背景には、普段の食事が安価であるパンなどの炭水化物を中心とした食生活が原因ではないかと言われているそうです。難民キャンプでは経済的理由により健康的な食事をするのもまま

ならないのです。診療後はヘルスセンター前にて建設途中である体育館の見学へ。難民キャンプは超人工密集地なので、このような運動の出来る場所はリラックスもでき、彼らの健康にとっても重要な場所であると感じました。体育館内を撮影しようとする、館内の職員にどうか写真は撮らないでくれと告げられました。どうやら、体育館を建設している事がイスラエル警察へバレてしまう事を恐れているようでした。日本では考えられないかもしれませんが、ここではイスラエルによる嫌がらせが横行しています。実際に、この年の春にシュファット難民キャンプ内にあり、人々の憩いの場でもあったプール施設が突然イスラエル警察によって破壊されています。そんな話を聞き、ふつふつと怒りを感じながらエルサレムにあるホテルへバスで移動中、隣に座っていたパレスチナ人の青年から話しかけられました。観光地ならともかく、ここ難民キャンプにいる外国人が珍しかったのでしょうか。「何処から来たの？」などと会話をしていると、シュファット難民キャンプから出る検問所に到着。検問所では機関銃を装備したイスラエル警察がバスに乗



シュファット難民キャンプ検問所にて外でIDチェックに向かうパレスチナ人の青年



古くからあるパレスチナ人の井戸



入植者用の地下水を汲み上げる新しい機械

車している全員の身分証明書をチェックします。外国人である我々は車内で座ったまま身分証明書を見せるだけで良いのですが、それ以外は降車を命じられ、外で一人一人チェックします。隣に座るパレスチナ人の青年に「君もここで降りないといけないよ」と言われましたが、シュファット難民キャンプに入る際の検問所で外国人の私は降車しなくて良い事を知っていたため返答に困りました。その青年は「？」とした表情で降車していましたが、車内に残った私は窓越しからIDチェックを外で受けている彼らを見て、何とも言い表せない気持ちになってしまいました。ここで生まれ育った彼らは日常の中に差別が存在し、それが彼らにとって当たり前となっている印象を受けました。

3. ヨルダン溪谷 (2019年10月23日)

エルサレムから見て北東に位置し、西岸地区とヨルダンとの国境沿いにあるヨルダン溪谷の視察をしに行くため、朝一にホテルを出発。ホテルから出発し約3時間弱でヨルダン溪谷のモシャブメホラというバス停に到着。現地でヨルダン溪谷をアテンドくださる溪谷連帯協会のラシード氏等が出迎えてくれました。まずは近くにある小さな村のバルデラ村役場の2階にある村唯一の診療所で、この村で起きて

いる医師や医療機器不足についてのお話を伺いました。緊急時には、隣町にある大きな病院まで車で行かなければならないとの事でしたが、その道中に立ち足かるのは検問所です。ここでもシュファット難民キャンプと同様にイスラエル警察による検問があり、緊急時でもIDがないと通過出来なく、検問所が原因で病院へ到着するのが遅れ、患者が死亡してしまう事例もあったそうです。診療所の次は村の井戸を見学。蜘蛛の巣が張ったポロポロの小屋の中にある錆び付いた水汲み機を見せてくれました。農村地帯であるここでは、水はととても貴重な資源だとマシード氏は言います。しかし、その井戸のすぐ隣の敷地には嚴重にフェンスで囲まれ、村の井戸と比べ6倍もの地下水を汲み取る事が出来る立派な施設が建ったせいで自分たちの水が十分に確保できなくなってしまったと嘆いていました。この立派な施設で汲み取った大量の地下水はヨルダン溪谷に移り住むイスラエルの入植地者へパイプを通して送っているそうです。溪谷連帯協会の事務所で昼食休憩を挟み、最後にイスラエル軍演習所や入植地近くに住むアブサケール氏宅へお邪魔する事に。アブサケール氏は広大な土地の中でぼつんと住居が佇み、羊や鶏などの動物を飼いながら長い間住んでいました。遠くには入植者居住区のフェンスが見えます。彼の住んでいる土地はイ

スラエル軍演習所や入植地に近いため、イスラエル軍はアブサケール氏宅を別の場所へ追い出したいのか、何度も家屋破壊の被害を受けたそうです。しかし、その都度同じ所に家を建て、住み続ける事でイスラエルに対し抵抗しているとの事でした。ここヨルダン溪谷に住むパレスチナ人達はイスラエルによって自由に移動する権利や住む権利を奪われ、大切な水という資源まで搾取されています。

4. ガザ地区 (2019年10月24日～2019年10月27日)

ガザ地区では4日間滞在したという事もあり、様々な出来事がありました。医療支援、バレーボールと絵画を通した子供支援、そしてグレートリターンマーチ（帰還の一大行進）への参加など活動は多岐に渡りましたが、ここでは私が感じたガザ地区という土地とガザ地区に住む住民について書いていこうと思います。今回私が泊まったのはガザ市の地中海沿岸に位置するホテルで、部屋からは地中海に沈む綺麗な夕日が観られました。白い砂浜もあり、部屋から見る景色はリゾートホテルにいるような錯覚に陥ってしまいますが、海の近くまで行ってみると愕然。たくさんのゴミが海に浮いており、電力不足により汚水が垂れ流しの状態でした。分離壁を超えて、たったの60キロメートル北に行けば豪華な本



海で海水浴する子供達とすぐ隣にある汚水が垂れ流しにされている排水溝



当のリゾートホテルがテルアビブにはあり、そこでは海と太陽の恵みを感じながら優雅に過ごしている人々がいるのに対し、ここでは仕事がなく暇を持て余した大人たちがただベンチに座り水平線を見つめ、子供達は汚水が混じった海の中を泳いでいます。この対比する2つのシチュエーションは力を持った片方がもう片方を奪い取って弾圧し、人為的に作り出された理不尽な現実なのです。しかし、そんな辛い状況下でもガザ地区の住人達はなんとか耐え忍んでおり、私達の様な外から来た人に対する親切心やホスピタリティは本当に素晴らしいものでした。道を歩けば元気よく挨拶してくれ、言葉は通じなくともジェスチャー使いながら「どうぞ此処に座って休んで下さい」と道端に椅子とアラビックコーヒーを差し出してくる人までいました。残念ながら日本ではイスラム教について理解が進んでいなく、ほんの一部の暴力的なムスリムによって悪いイメージを持っている方が多くいるかと思いますが、イスラム教とは弱者に寄り添って物事を考える宗教であり、人に親切であろうとする純粋な気持ちを持った宗教です。パレスチナ人達と実際に接する事で身をもって実感しました。

5. まとめ

今回私が訪問したのは主にエルサエム、ヨルダン溪谷、ガザ地区の3か所

です。その土地毎に様々な人為的な問題、宗教の対立や、ハマスとPLOの対立、アメリカなどの他国の力など加わり、様々な問題が絡み合っている事が良く理解出来ました。例えるならば、何百本もある糸がぎゅうぎゅうに絡まったような状態であると言えます。パレスチナ難民が生まれてから70年という長い年月が経過していますが、その絡まった糸はどんどん複雑になってしまっていると感じます。この絡まった糸を解くには、また更に長い年月をかけて誠実で持続的に支援をしていかなければならない。そのためにも、若い世代がパレスチナ解放に向けてのムーブメントを今後は先頭に立って作り上げていかなければならないという風に感じました。

最後に、イギリスを拠点とし活動を続け、パレスチナについての作品を多々残している匿名アーティストのバンクシーが、ガザ地区内の壁に描いたメッセージを紹介します。

”If we wash our hands of the conflict between the powerful and the powerless, we side with the powerful – we don't remain neutral.” (訳=力を持つ者と持たざる者の争いに背を向けるなら、それは力を持つ側に立つことになるのだ。中立な立場などありえない。) 圧倒的な力を持っているイスラエルと弱者であるパレスチナの間で傍観者になる事はイスラエルの味方と主張していると同じ事です。是非、今自分に出来る事を何か始めてみませんか。

グレートリターンマーチに参加しているガザ地区の子供達





第13次パレスチナ 医療・こども支援活動報告

宮岡 慎一

国自体・街自体が全体的にどこか自然でない…
そんなどこか「人工的である」

皆様、はじめまして。現在、京都で初期臨床研修に従事している宮岡慎一と申します。私は2019年第13次パレスチナ医療・子供支援活動（以下、支援活動）に医学生（当時、北海道大学医学部医学科6年次）として参加させていただきました。医学生として、また将来国際協力の道を志すものとして、現地で活動した中で見えてきた現実や、その中から生まれた考察について率直に報告させていただきたいと思えます。

1. 渡航前のイメージ

イスラエルやパレスチナと聞くと皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？教科書やニュースでたまに目にする「パレスチナ」「ガザ地区」…何となくテロや紛争など危険なイメージがありつつも正直、馴染みがないというのが率直な感想でした。この「イスラエル問題」（猫塚先生の言葉を借りると）は第二次世界大戦や旧約聖書の時代から起きてきたさまざまな事象の延長線上にある問題で、現在の一部分を切り取ってみても理解することはできません。問題を正確に理解するためには聖書からホロコースト、その後のアメリカ主導の世界情勢に至るまでさまざまな歴史的・政治的知識が必要となってきます。そしてそのほとんどは日本とは遠い、ヨーロッパやアラブ、あるいはアメリカの関係性の中で生じてきたものであり、日本で生活する中でこの「イスラエル問題」を身近に実感することは、他の国の人と比べてとりわけ難しくなっています。残念ながら

私達の印象や知識といったものも教科書やニュースのわずかな記載やイメージから得たものばかりであり画一的なものになりがちです。恥ずかしながら私も同様であり、パレスチナやガザ地区に関してはテロや紛争地域といった印象しか持っておらず、一方でイスラエルといえば軍事力やITといったイメージしかありませんでした。以前、海外旅行中に会ったオランダ人の若者の言葉が印象的でした。「イスラエルはバカンスの場所、死海やアート、お酒やクラブなどが揃っていて休暇に行くのが楽しみ」とのことでした。欧州の若者の中には少なからずこのようなイスラエルの印象を持つものもいます。

2. 見えてきた現実

a) イスラエルについて ～心休まることのない緊張感、そしてどこか人工的～

私達がイスラエルのベングリオン空港に到着した翌日10月22日はイスラエルの長期祝日であるSukkot（日本語では仮庵祭）の最終日ということもあり旧市街には本当に多くの人で賑わっていました。ただどこか日本や他国の祭日と違い居心地の悪さを感じます。その理由は明確でした。見渡すと、おびただしい数の機関銃を持った兵士が常に私達を含む人々を監視しています。パレスチナ人による苦肉の抵抗行為（自爆など）に手を焼いた歴史のあるイスラエルにとって、特に人が集まる祝祭日は緊張感が高まります。普段、拳銃や兵士すらほとんど目にしない私

達日本人にとってこれほど居心地の悪いことはありません。ましてやこれがパレスチナ人であれば…まるでテロリストと思われ監視されているような錯覚に陥りその精神的な負担たるやいかほどであろうかと想像に堪えません。イスラエル人からしても同様で、身の回りでテロや発砲事件がいつ起こってもおかしくなく、またいつ自分がまきこまれるかわかりません。常に「不安」や「緊張感」を感じざるをえない、これはイスラエル滞在中全てにおいて私が感じていたものです。

エルサレムの街はトラムラインを境に二分され、私達は活動中は旧市街を含む東側地域に滞在していました。エルサレムの東側地域は主にパレスチナ人を中心としたアラブ地域の人々の居住地域が広がります。そこではケバブの店が並び、床にブルーシートを広げ菓草を売る女性や人懐っこいアラブ人のおじさんがタクシー乗らないかと話しかけてきます。一方で西側は新市街を含めヨーロッパの影響を色濃く受けつつユダヤ教徒の居住地域が広がり、旧約聖書を片手に持った超正統派のカップルが子連れで散歩し、夜にはおしゃれなカフェやバーで人々が飲食を楽しみます。わずか1kmの範囲にこのような全く異なる文化圏の人々や生活スタイルが共存しているのです。至るところで国自体・街自体が全体的にどこか自然でない…そんなどこか「人工的である」、それが私のイスラエルの印象です。

b) 難民キャンプ、パレスチナ（西岸）～難民としての暮らし、認められない権利～

パレスチナといったときに、それはガザ地区の他、西岸やイスラエル領内に散在する難民キャンプのことを指します。今回、活動の中心となったのはエルサレム内唯一の難民キャンプであるShu'fat難民キャンプです。四方を分離壁で囲まれ、嚴重な検問所を超え

てまず目につくのは所狭しと並ぶ集合住宅です。特記すべきはどの建物も建設途中である点で、屋上には次の階を増設するための鉄柱が立っています。居住区域が制限されている難民キャンプでは建物を上へ上へと増築することで居住スペースを作らざるを得ません。

またところどころに無残に破壊された建物が散見されます。度重なるテロ行為を経て、パレスチナ内での軍事集会などをイスラエル当局は厳しく警戒・取り締まっており、結果として時に疑いや十分な根拠がないまま数少ない娯楽施設や民家までもが破壊されます。（これらの行為は demolition - 破壊、取り壊し と言われます）最新鋭の装備を身に付け、行政や司法を駆使し法的な根拠を作って demolition を実行するために難民キャンプにきたイスラエル軍に、現地の住民は成す術はありません。自分たちが限られた資源や機材を用いて建設した建物や施設が破壊されるのを黙って見守るよりほかはないのです。

西岸地域は拡大する入植地が非常に印象的でした。石や土で作られたパレ

スチナ人の建物がまばらにある一方、一度分離壁をまたぐと西洋風の建物が建ち並びます。これはいわゆる「入植地」と呼ばれるエリアで年々拡大が続いています。出入域は制限されており、ゲートでは監視員が目を光らせています。そんな中をアメリカ英語を話す若者が颯爽と入っていきます。このように世界中から集まったユダヤ教徒が次々この西岸地域に「入植」し、実質的な領土を拡大しています。ここでも先述の demolition は行われており、上水施設など生活の基盤となるライフラインが破壊された結果、ヨルダン川からわずか数kmの距離に住む人々が川から水を引くことができず、逆にイスラエルから高値で水を買う必要があるという歪な現象が起こっていました。抵抗する術なく住居や生活、自由が制限される…それが現在のパレスチナの一つの姿です。

c) ガザ地区 ～自由なく、危険と隣り合わせの生活～

移動の自由がなく常に身の危険にさらされ続ける、そんな生活を日本に住む私達はどれほど想像することができ

るでしょうか？そんな考えられない精神的な負担に常にさらされながらガザ地区の人々は生活をしています。

イスラエルとガザ地区の出入り口はたった一つ、エレッツ検問所です。イスラエル・パレスチナで最も警備の厳しいチェックポイントであり公的な理由がない場合は通過することはできません。その他のガザ地区とイスラエルの境界にはイスラエル軍が築いたトーチカが散在しイスラエル軍が常に監視および射撃用意をしています。こういった理由でガザ地区は完全に外界との交流が立たれたいわば「世界最大の天井のない監獄」となっているのです。全長50km、面積約360平方キロメートルの中で生を受け、そのまま外の世界を見ずに人生を終える人々もいます。

またガザ地区では安全の保障は必ずしもありません。私達は現地職員の好意もあり国連職員が滞在する建物に宿泊し、移動は通称「UNカー」と呼ばれる白地に大きくUNの文字が印字された防弾装備のあるワゴンで移動したため滞在中の安全はある程度確保され



ていましたが、一般の市民はそんなことはありません。ガザ地区の政治的・軍事的中心である「ハマス」の幹部を標的としたイスラエル軍のドローンやミサイル攻撃は時として一般市民を巻き込みます。ガザ地区での猫塚先生の外来診療中にも流れ弾にあたり右顔面神経の一部を損傷した男の子がいました。ネット上ではガザ地区のエジプト国境の街 Rafah にて何の前触れもなくミサイルで建物1棟が爆破され周囲の人々が逃げ惑う様子が撮影されています。いつ、どこでこのような事態に巻き込まれるかわからない、そのような精神的負担の中で人々は生活しています。

d) パレスチナの医療事情 ～疾患は中所得国に類似するが、医療環境は特殊～

パレスチナの問題を語るうえでキーワードとなるのは①生活習慣病、②特殊な医療へのアクセス状況です。

パレスチナの医療事情はいわゆる低所得国 (Low-income country) と呼ばれるアフリカ諸国の医療事情とは様相が異なります。アフリカの国々に代表されるいわゆる低所得国では低栄養や感染症が人々の命を奪うのに対して、東南アジアや中米の国々など中所得国 (Middle-income country) では生活習慣病が人々の健康を蝕みます。そしてパレスチナの医療事情はどちらかというところ中所得国の状況に類似します。例えば、今回の猫塚先生の整形外科の外来診療では肥満から来る変形性膝関節症の患者の数に驚かされました。難民キャンプで肥満が多い原因に、貧困状態にある難民の食生活ではUNRWAから提供される炭水化物の小麦粉 (=パン) が主食となり、砂糖の消費がケタ違いに多い点、紛争地での運動環境の劣化や運動習慣の少なさが挙げられます。治療可能な感染症や低栄養により命を落とすほどの貧困ではないものの、健康的な生活を送るほど

の豊かさや自由がなく結果として生活習慣病により人々の健康が害されている。現地での支援活動を通して、そんな印象を感じることができました。

また政治的な理由で必要な医療が受けられない場合もあります。パレスチナ人はイスラエル領に入る際はチェックポイントの通過が必須となり、不必要な移動は認められません。まだらなイスラエルによる入植地の拡大およびチェックポイントによる移動の制限は例えば緊急手術が必要な患者やお産を控えた妊婦にとって時に命取りとなります。必要な書類を集めなければ通行は許可できない、とのことで重篤な患者の手術が大幅に遅れ、結果として患者が亡くなってしまったという話をヨルダン渓谷で活動した際に聞き大変驚きました。必要な時に必要な医療が受けられない、というのは日本にいる私達ではなかなか想像しづらい不安・恐怖です。

3. 必要な支援・協力のカタチとは？ ～「教育」の重要性、持続可能な成長を～

国を超えた支援・協力のカタチとはどうあるべきか。この活動期間を通して、何度も自問自答する機会に恵まれました。国ごとに、コミュニティごとに、もっと言えば個人個人にとって必要な支援・協力のカタチは異なります。そしてその支援や協力は自己満足に任せて相手に押し付けるようなものになっては絶対にいけません。人と人との助け合いは常に相手にとって現状何が問題なのか？どんな支援や協力が必要なのかを適切に見極めて、適切なサポートや答えを提示することが重要であり、またそのような活動を継続することで長期的・持続的な課題の解決を目指すことが目標です。

その意味で今回の支援活動は「人を育てる」ことを重要視した非常に価値のあるものでした。現地のドクターや看護師、作業療法士や理学療法士と盛

んなディスカッションや指導を行うことで彼らがその後も指導的な立場で現地の医療を支えます。猫塚先生が招聘し、日本で研修をおこなった若手のモハマド医師、理学療法士のラビーバさんや看護師のアフメッドさんは中核人物として現地の医療に多大なる貢献をしており、その場限りではない長期的かつ持続的な支援の理想形を学ぶことができました。

また医療支援活動と同時に行われた子供支援活動の重要性を認識することができました。ガザ地区では子供の数が多く、学校は3部制で授業は基本的なもの (国語・算数など) のみ開講、子供たちは芸術や体育などに触れる機会がありません。その意味で清末先生や細川先生が行った絵画授業やバレーボール講習は子供たちに新たな機会を提供する素晴らしい機会になりました。中には非常に器用に絵やバレーを行う生徒もおり、国や地域は違えど才能を持った子はどこにでもいることを実感しました。子供たちにさまざまな「機会」を提供することの長期的な影響は絶大です。今回の支援活動が持続可能な発展目標 (Sustainable Development Goals : SDGs) を念頭においた、一つの国際協力の理想モデルとした機能していると確信しています。

そしてこのような支援活動が実現したのはひとえに猫塚先生はじめ奉仕団や支援者の皆様のたゆまぬ努力により築いてきた現地との信頼感があったからこそと強く感じます。行動を継続し、継続が信頼に、信頼が変化に、変化が実績につながるようになるためには並大抵ではない努力が必要です。国際的な連携・協力を志すものとして忘れてはいけない姿勢を学ぶことができました。

4. 今回の支援活動の目的 ～希望をもたらす、君たちを忘れない～

今回の支援活動の目的を自分なりに解釈した時に、それは先述のような現地での医療支援や子供支援活動といったプラクティカルなものにとどまりません。猫塚先生は「支援活動を通してパレスチナやガザの人々に希望をもたらしたい、遠く離れた地に住んでも決して君たちを忘れない・見捨てない、そんな思いを伝えたい」そう話してくださいました。私達が「対岸の火事」としてあまりパレスチナに関心を寄せてないのと同様に、時を経るにつれ人々の関心は薄れていきます。終わりの見えない閉塞感の中で世界からも少しずつ忘れられ、諦めの中で生活する人々に現状を変える力はあるでしょうか？一方で、自分を気遣ってくれる人がいる、応援してくれている人がいる、期待してくれている人がいると思うと人は想像を超えて強くなることができます。今回の活動の目標には、常に精神的なストレスにさらされるパレスチナ・ガザの人々にとって少しでも心の支えを提供する、そのような側面があったことも忘れてはいけません。

5. 今後の誓い、そして皆さまへ

今、私は初期研修医として慣れない仕事や人の命を扱う責任感に時には押しつぶされそうになりながらも将来の目標を忘れずに日々の生活を送っています。今回の支援活動に参加させてもらったことは私の人生の方向性をさらに具体的にするかけがえのないものになったと確信しています。猫塚先生をはじめ多くの方々からいただいた多大なご支援を、まずは十分な能力を身につけた臨床医となった上で日本・海外を問わず多くの人々に還元したい、そんな決意を今回の活動を通してより強固にすることができました。

そして皆様にお願ひがあります。文中でも述べましたが、パレスチナ・イスラエルを巡るさまざまな問題や現地の様子には多分に人工的な要素を感じざるを得ません。つまり人々の自由や命までも脅かす諸問題は自然発生したものではなく、なんらかの意図をもって人工的に作られたものだと考えます。そうであれば、同様に人々の力で作り直すことも可能なのではないのでしょうか？そのためには現地の人々のたゆまぬ努力、そしてそれを下支えす

る私達の支援や気持ちが必要です。ぜひ、パレスチナ・イスラエルを巡る諸問題を「対岸の火事」と考えず、関心を持ち続け現地の人々に思いをはせることが重要だと思います。皆が忘れなければ、声は希望となり、希望は力となります。今後とも現地の人々への思いを忘れずに、どのような形であれ支援の輪を広げていくことができるようご協力よろしくお願ひ致します。

6. 最後に

もともとは札幌での猫塚先生の支援活動の報告会に参加したことが事の始まりでした。私は北海道の最東端に位置する根室市出身で北方領土島民3世であり、それを意識し始めた大学入学時より北方領土問題に留まらず国際問題や国際協力活動に強い興味を持つようになりました。また学生時代にはアメリカで1年間の留学を経験し、その後も世界のさまざまな国で臨床実習を行う機会に恵まれ、将来は日本や海外という枠組みに捕らわれず人々の健康に寄与できるような人材を志すようになりました。少しでも世界との関わりを持ちたいと思う一心から、学生時代はがむしゃらに国際支援や海外での活動の報告会などに参加しており、そんな中で猫塚先生に出会いました。ヨーロッパやアメリカ、アラブの人々と比べて問題意識が低い…ある意味では「他人事」であったパレスチナを取り巻く諸問題が「対岸の火事」ではないと実感させてくれたのは猫塚先生や奉仕団の皆様のご活動報告でした。その後、猫塚先生をはじめ団員の皆様の多大なる支援の上で現地での活動に参加させていただき、現在この報告書を執筆しています。この報告書が皆様のイスラエル・パレスチナを巡る諸問題の理解の一助になることを願ってやみません。改めまして、日頃よりいただいている多大なるご支援に感謝申し上げます。ありがとうございました。





第13次支援活動に参加して

坂東 和之（元北海道新聞カイロ駐在記者）

「進撃の巨人」さながら、約200万人が高い壁に閉ざされ・・・

猫塚義夫団長らとともに昨年10月下旬、10年ぶりに中東パレスチナのガザ地区を訪れました。北海道新聞のカイロ駐在記者として2009年秋に初めて訪れた際、イスラエルの大規模空（08年末～09年1月）で破壊された街並みを見て、その惨状に呆然と立ち尽くしたことを思い出します。14年にも大規模空爆があり、この2つの空爆で3,000人以上が犠牲になりました。

今回、奉仕団の活動で強く印象に残っているのは、イスラエル軍から銃撃され治療・リハビリを受ける銃創の患者たちです。弾丸が体内でチョウのように広がり大きなダメージをもたらす蝶形弾（ちょうけいだん）も使われていました。

ガザ地区は07年にイスラエルによっ

て完全封鎖され、「天井のない監獄」と言われています。漫画「進撃の巨人」さながら、約200万人が高い壁に閉ざされ、空爆におびえ、貧困や失業に苦しみながら暮らしています。国際法で違法とされるこの封鎖に抗議し、住民たちは18年春から毎週金曜日、イスラエルとの境界近くで「帰還大行進」と呼ばれる民衆デモを行っています。投石で抗議するガザ住民に、イスラエル兵は容赦なく銃弾と撃ち込んできます。この2年近くで300人以上が銃殺され、負傷者は数万人とされています。

デモで銃撃を受けた多くの銃創患者らが、奉仕団の診療を待ちわびていました。「整形外科医は患者さんの体に触れて診察することが多いので、信頼関係や安心させるような対応が大切

なんです」と話す猫塚団長は、患者さん一人一人と真剣に、気持ちを込めて向き合っていました。ガザでは専門医が少ないだけに、現地の医療スタッフたちもアドバイスに真摯に耳を傾けていました。猫塚団長が現地で信頼を勝ち得て、温かく迎えられるのは、ベテラン医師としての技量だけでなく、患者さんに寄り添うその姿勢なのだと強く感じました。

「銃撃される恐れがある危険なデモは止めたほうがいい」といった声を日本で耳にしたことがあります。しかし、銃創患者を含む多くのガザ住民は、抗議デモを止めません。イスラエルという「巨人」に立ち向かう住民の叫びは、ガザ封鎖、パレスチナ問題といった不条理な現状を長きに渡って放置する国際社会、つまり我われに向けた叫びでもあります。最近では、パレスチナに関する報道は随分と少なくなっています。報道に携わる者として「銃創患者たちの傷跡を自らの戒めにしなければいけない」と強く感じた、有意義な訪問となりました。



資料



北海道パレスチナ医療奉仕団とRAWA (アフガニスタン女性革命協会) による「アフガニスタンとパレスチナの今のお話」

2019/10/12 (土) 17:30 開場 18:00 開演

会場：札幌エルプラザ2階環境研修室 会費:500円 (学生以下無料)
札幌市北区北8条西3丁目 札幌駅北口 お問合せ：猫塚 (090-8274-3163)

第一部 RAWA(アフガニスタン女性革命協会) メンバーによる
911 後の軍事攻撃から 18年、アフガニスタンのいま
～女性と子供たち、そして私たち～



18年前の10月18日に米軍がアフガニスタンの空爆を開始しました。現在も戦乱が続き、多くの難民が困難を抱えて生活していますが、一方でメディアが現地的情勢を報道する機会は減りました。そこで私たちはRAWAのメンバーを招聘し、アフガニスタンの実情、ジェンダー問題、子供たちの状況をうかがうことにしました。生の声を通して、アフガニスタンのことを知ると同時に、私たちを取り巻く問題についても考える機会にしたいと思います。

第二部 北海道パレスチナ医療奉仕団による
「第13次医療 子供支援活動」事前報告会



2011年から開始され「パレスチナ難民医療支援活動」が今回で13次となります。10月20日～11月11日までの期間、ヨルダン川西岸とガザ地区での活動を予定しています。今回は、これまでの医療・こども支援活動に加えて10項目の課題に取り組みます。この「事前報告会」で、活動の基本とメンバーの紹介をいたします。御多忙中と存じますが、皆様のご出席を心からお願いいたします。パレスチナ医療奉仕団 団長 猫塚義夫

同時開催のご案内 「パレスチナ・アフガニスタン難民写真・刺繍展」
9月14日～10月14日 くまざわ書店 アリオ札幌店



主催：「北海道パレスチナ医療奉仕団」
「RAWAと連携する会」共同代表・呼びかけ人 室蘭工業大学 清未愛紗
共催：「医療9条の会・北海道」、「高崎法律事務所・9条の会」
お問い合わせ先 北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚 (090-8274-3163)
065-0019 札幌市東区19条東22丁目5-13 Mail:hokkaido.palestine@gmail.com

北海道パレスチナ医療奉仕団による
「中村哲医師追悼」
「第13次医療 子供支援活動帰国報告会」

2020/1/25 (土) 18:00 開場 18:30 開演

会場：札幌エルプラザ2階環境研修室 会費:500円 (学生以下無料)
札幌市北区北8条西3丁目 札幌駅北口 お問合せ：猫塚 (090-8274-3163)

第一部 中村哲さんを悼んで



去る2019年12月4日 アフガニスタンで凶弾に倒れたベシャワールの会の中村哲医師を会場参加の皆さんとともに偲びたいと思います。
またこれまでの活動やその根底にある思想について中村氏と交流のあった方たちのお話を交え、見つめなおし、これからの私たちの進むべき方向について考えていきたいと思います。

第二部 北海道パレスチナ医療奉仕団
「第13次医療 子供支援活動」帰国報告会

皆さんからの温かいご支援により、2019年10月20日～11月10日の期間、私達は「第13次医療・こども支援活動」を実施することができました。心から感謝する次第です。
パレスチナとイスラエルをめぐる状況は、トランプ米大統領に後押しされたネタニヤフ政権による「ジェノサイド(民族絶滅政策)」が一層深刻化されています。イスラエルによるガザ地区の「完全封鎖」も12年以上経過し、ヨルダン川西岸では「入植地」のイスラエル領土化宣言が公然と行われました。そうした中で、これまでの医療活動とともにガザ地区でのリハビリ技術講演活動や子供支援活動としてバレーボール・絵画活動を実施いたしました。今回は、総勢7名の活動でしたが初めてマスコミ関係者の参加があり、現地パレスチナ人からの「生の声」を聞く証言活動に着手いたしました。また、若手メンバーや医学生への参加は今後の「奉仕団」の活動の未来を切り開くものでした。
今回の「報告会」では、参加したそれぞれのメンバーからの思いも含めた報告が行われます。皆様のご出席をお願いする次第です。

北海道パレスチナ医療奉仕団 団長 猫塚義夫



現地の女子学生とバレーボールを通じて交流する堀川さんと清未さん | ガザ地区周辺で「封鎖の解放」を訴える市民たちと奉仕団のメンバー | 子供の下肢の状態を診察する猫塚医師 | 難民の診療に参加する医学生・宮崎さん

主催：「北海道パレスチナ医療奉仕団」
共催：「医療9条の会・北海道」、「高崎法律事務所・9条の会」
お問い合わせ先 北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚 (090-8274-3163)
065-0019 札幌市東区19条東22丁目5-13 Mail:hokkaido.palestine@gmail.com

追悼声明



～「ベシャワール会」現地代表・中村哲先生の死を悼んで～

2019年12月7日「北海道パレスチナ医療奉仕団」

去る2019年12月4日午前8:00頃(現地時間)、中村哲先生は、アフガニスタン東部ジャジャバード近郊で武装集団に急襲され、死亡されました。
こうした事態にあたり、私達は中村先生のこれまでのアフガニスタンにおける難民支援活動に敬意を表し、心から哀悼の意を捧げます。
30年間にわたるベシャワール会と中村先生による難民支援活動は、当初の医療活動から「命の水」を求めて1600所の井戸を掘削し、更に灌漑用水路の開発へと活動を前進させました。その結果、戦乱・貧困と干ばつで荒れ果て砂漠と化していた農地に緑が回復し、多くの住民が農村に帰ることができました。
こうした成果もアフガニスタン復興の第一歩と考えていた中村先生にとり、これからの備えての活動中に受けたのが今回の凶行でした。断じて許すことのできない蛮行です。同じ難民支援を志している私達にとって慙愧に耐えられません。

2011年5月札幌の講演会にお招きした際、結成もない私たちのパレスチナ難民支援活動について大きな関心を示し「小さな希望でも実現するために力を尽しなさい」「ケガや病気の背景にある戦争や貧困をなくすることも大切な仕事」と語られました。また「武器ではなく命の水を」「100万発の銃弾より、1本の用水路」の信念は、非武装・非武力を掲げる私達の難民支援活動に大きな力をもたらしてくれました。
一方、中村先生は日本国憲法、とくに憲法9条を守り発展させることに積極的に発言してきました。「日本国憲法は、私達の理想。理想は、守るものではなく実行するもの」などの言葉で憲法への思いを語り、安倍政権が主導している集団的自衛権の行使に反対してきました。

このように人々の平和な暮らしを求めて、アフガニスタンや日本国内で行われてきた中村先生の思想とそれに基づく実践は、これからは多くの人々により継続・発展させられてゆくものと確信しています。

今後、私達は、パレスチナ難民支援活動をより一層発展させることに力を注いで行くことが中村先生の御遺志に応えるものと考え、これからの更なる努力を重ねてゆく所存です。

2020年
北海道パレスチナ医療奉仕団による学習講演会のお知らせ

2020/2/29(土) 18:00 開場 18:30 開演

会場：札幌エルプラザ4階大研修室B/C 会費：500円(学生以下無料)
札幌市北区北8条西3丁目 札幌駅北口 お問合せ：猫塚 (090-8274-3163)

「アメリカ・イラン戦争と中東の危機」

本年1月3日のアメリカによるイラン軍事司令官の殺害により「アメリカ・イラン戦争」の可能性が高まりました。現在も両国間の緊張は依然として続いています。そうした中東情勢の中で、安倍政権は依然として自衛隊(護衛艦1隻、P3C哨戒機2機)をアラビア海へ派遣しました。これらは、米「有志連合」への事実上の参加であり情報の提供(軍事偵察)や燃料補給が想定されているのです。これらは、もしアメリカによる中東での軍事行動が始まれば、戦後初めて自衛隊が海外での戦争に巻き込まれ可能性があるのです。

講演者の紹介 (最後に元自衛官による特別発言があります)

 <p>勉強会の意図 清室愛紗 憲法学者 室原工大准教授。現職での憲法性やイスラム圏の人権問題、特にジェンダーの問題に取り組んでいる。</p>	 <p>現代イランの文化と宗教 松本聡郎 イスラム学者 聖トマス大学教授などを兼任するイスラムの共生思想やその現実に沿ったメンタリティーに詳しい。</p>	 <p>中東自衛隊派遣の危険性 佐藤博文 弁護士 北海道弁護士連合会憲法委員会委員 自衛隊の海外派兵の問題などに取り組んでいる。</p>
---	---	--

こうした中東イラン情勢の中で、現代イランとはどのような国なのか、私達とどのような関連があるのかを今一度学ぶ機会が必要ではないでしょうか。清室愛紗室工大准教授の発言とイラン研究の専門家である松本聡郎氏から講演をいただきます。同時に、これに就いて安倍政権が憲法違反の「安保法制」の行使として行う自衛隊海外派兵の持つ意味とこれからの平和外交の推進について、北海道弁護士連合会憲法委員会/事務局長であり多数の自衛隊関係の事件に関わっている佐藤博文弁護士から語られます。そして、最後に実践経験のある元陸上自衛隊員から自衛隊活動の実態について特別発言を用意いたしました。皆様のご出席を心からお待ちしています。

北海道パレスチナ医療奉仕団 団長 猫塚義夫

主催：「北海道パレスチナ医療奉仕団」
共催：「医療9条の会・北海道」、「高崎法律事務所・9条の会」
「グリーン9条の会」
お問い合わせ先 北海道パレスチナ医療奉仕団 猫塚 (090-8274-3163)
065-0019 札幌市東区19条東22丁目5-13 Mail:hokkaido.palestine@gmail.com

2020年1月23日 札幌紀伊国屋書店前。
アメリカとイラン戦の「危機」と日本の自衛隊中東派遣に反対する宣伝を行った。

戦争反対!!!!

**アメリカ・イランは軍事行動を自制せよ！
安倍政権は自衛隊の中東派遣を撤回し、平和外交努力を加速せよ**

主催：「北海道パレスチナ医療奉仕団」 共催：「医療9条の会・北海道」「たかさき法律事務所9条の会」

「戦争反対」の横断幕

戦争反対!!!

**アメリカ・イランは軍事行動を自制せよ
安倍政権は自衛隊の中東派遣を撤回し、平和外交努力を加速せよ！**

2018年のトランプ米大統領による「イラン核合意」一方面的離脱に端を発したアメリカ・イラン間の緊張関係は、1月3日のアメリカによるイラン軍事司令官の殺害により「アメリカ・イラン戦争」の可能性が高まりました。現在も両国間の緊張は依然として続いています。今回の事態の解決は、アメリカの「イラン核合意」への復帰を要し、経済制裁の緩和などを通じたイランとの外交努力が必要です。

そうした中東情勢の中で、安倍政権は海上自衛隊のアラビア海への派遣を閣議決定しました。その内容は護衛艦1隻、P3C哨戒機2機で1月20日から12月26日におたり行われます。これらは、米「有志連合」への事実上の参加であり情報の提供(軍事偵察)や燃料補給が想定されているのです。これらにより、もしアメリカによる中東での軍事行動が始まれば、戦後初めて自衛隊が海外での戦争に巻き込まれ可能性があるのです。平和憲法を持つ日本国民として認めることはできず、安倍政権は、あくまでも積極的な平和外交努力を加速すべきです。自衛隊が米国主導の「有志連合」に参加しないといは、それとの共同歩調は中東諸国から見れば米と日本の共同軍事行動とみなされてしまいます。2011年以降、非武装・非暴力のNGO活動として、パレスチナ難民支援活動を行っている「北海道パレスチナ医療奉仕団」は、その活動を発展させるためにも海上自衛隊の中東への派遣を認めることはできません。

アメリカとイランに対し、これからの諸問題の解決のために軍事行動の自制を要求します。そして、安倍政権に対しては、日本を戦争に巻き込む自衛隊の中東派遣を撤回し、中東でも平和外交努力を加速させることを強く要請いたします。皆様のご理解とご協力を心からお願いたします。

主催：「北海道パレスチナ医療奉仕団」 共催：「医療9条の会・北海道」「たかさき法律事務所9条の会」

パレスチナでのイスラエル「入植地」併合に抗議します。


～黒人・人種差別反対、パレスチナ民族絶滅政策阻止～

主催：北海道パレスチナ医療奉仕団 共催：医療9条の会・北海道
E-mail: hokkaido.palestine@gmail.com TEL:090-8274-3163
2020年7月1日

市民の皆さま
日本国内外で、新型コロナウイルス感染が収束しきれない状況が続いています。本日からイスラエルは、パレスチナ領土内の「入植地」を自国に併合する計画です。国連により国家と認められているパレスチナからの土地収奪は、完全な国際法違反なのです。

パレスチナ人の「自治区」としてイスラエル内にある地域は、分離壁や監視塔、入植地により分断され、そこでは深刻な人権侵害が行われています。イスラエルが行っているパレスチナ人の民族絶滅(ジェノサイド)政策の根底には、ユダヤ原理主義によるパレスチナ人への人種差別があります。一方、こうしたイスラエルの動きを後押ししているアメリカでは、ジョージ・フロイドさんの殺害を契機に黒人差別反対運動が湧き上がり、それが人種差別反対運動へと世界的な広がりをを見せています。人種差別を共通性として、イスラエルでのパレスチナ人差別と米国での黒人・有色人種差別が進行しているのが今日の現実ではないでしょうか。

今私達に求められるのは、イスラエルによる「入植地」併合という暴挙をやめさせ、世界中から人種差別を撤廃するために行動を起こすことです。私達自身が声を上げ、国際世論の高まりとねりをつくり、イスラエルの暴挙と人種差別にストップをかける力の結集を心から呼びかけるものです。



2020年7月1日 札幌紀伊国屋書店前。
パレスチナ。ヨルダン川西岸におけるイスラエル「入植地」併合の抗議行動
イスラエルにおけるパレスチナ人差別とアメリカにおける黒人差別を「人種差別」反対の共通課題としてかかげた。


パレスチナでのイスラエル「入植地」併合に抗議します
～黒人差別・人種差別反対 パレスチナ民族絶滅政策阻止～

7月1日(水)17:30～18:30 札幌駅西口 紀伊国屋書店前

パレスチナでは、7月1日からイスラエルによる「入植地」の併合が始められようとしています。その根底には、ユダヤ人・シオニストによる「パレスチナ人への人種差別」と「ジェノサイド」政策があります。国際的にもトランプ米大統領に後押しされたイスラエルへの批判が高まっています。

一方、今日、米を中心に起きている黒人差別反対・BLM運動は、「人種差別反対」へと世界中に広がりをを見せてきました。これは、私達が取り組んできたパレスチナ・イスラエル問題と重なる共通性があります。こうした動きに皆さんからのご参加を心から願っています。

主催：北海道パレスチナ医療奉仕団 共催：医療9条の会・北海道



大人向け絵本
《世界》がここを忘れても
 アフガン女性・ファルザナの物語
 文：清末愛砂 絵：久保田祥子 / 定価1980円(税込) / 2月15日発刊
 写真集
ペンとミシンとヴァイオリン
 アフガン難民の抵抗と民主化への道
 清末愛砂著 / 定価1650円(税込) / 7月上旬発刊予定

刊行記念講演

日本のメディアが報じないアフガン女性の生活と教育



9.11後のNATO侵攻、タリバン政権の崩壊と混乱、そしてISの台頭……
 激動のなか、それでも国内で暮らし、あるいは難民キャンプへ移らざるをえなくなったアフガンの人々。
 とりわけ捨てられてきた女性たちは、その後どうなったのでしょうか。
 RAWA(アフガニスタン女性革命協会)を支援する「RAWAと連帯する会」共同代表の清末愛砂さんと
 「北海道パレスチナ医療奉仕団」代表の猫塚義夫さんが、現地の状況や教育の環境について語ります。

清末愛砂 (きよすゑあいさ)
 1972年生まれ。室蘭工業大学大学院工学研究科准教授。専門は、憲法学、家族法。アフガニスタンのジェンダーに基づく暴力、主要著書に『平和とジェンダー正義を求めて—アフガニスタンに希望の灯火を』(共編著、博文社、2019年)、『自衛隊の交戦と人道法—国際法が守るべき市民』(共編著、現代人文社、2019年)、他多数。「RAWAと連帯する会」共同代表。

猫塚義夫 (ねこづかよし)
 1947年生まれ。整形外科医。札幌市在住。北海道パレスチナ医療奉仕団代表。2010年に北海道パレスチナ医療奉仕団を立ち上げる。毎年実施しているパレスチナでの医療支援は昨年12回目を迎え、また、昨年7月には、WHOの承認による、ガザでの支援活動を承認。医療奉仕を通じて見えてくるパレスチナと日本の暴力性について、精力的に発信を続けていく。

8月22日(土) 14:00-15:30

紀伊國屋書店札幌本店 1F インナーガーデン
 札幌市中央区北5条西5丁目 sapporo55ビル 電話 011-231-2131

予約不要・参加無料 共催：寿邦社・室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域清末研究室



ナクバを知っていますか
 ~ホロコーストやアウシュビッツは聞いたことがあっても~
 撮影 古居みずえ

2020年8月29日(土)「ナクバの日」特別講演
 13:00 開場 13:30 開演 会場とオンライン講演を同時に開催します

会場：札幌エルプラザ2階 環境研修室とZOOM
 資料代：一般500円 学生・オンライン参加者 無料

会場参加ご希望の方は予約用Eメールアドレスにお名前、連絡先と会場参加希望と明記のうえお送りください。(感染対策のため定員を設けています)
 Zoomによるオンライン参加ご希望の方は、8月26日水曜日まで予約用Eメールアドレスに登録メールを入れてください。8月29日当日午前中までに「奉仕団」からZoom招待メールをお送りし、13:00からZoomを開きますので13時以降に招待URLをクリックしてご参加ください。
 予約用 Eメールアドレス hokkaido.palestine@gmail.com

- 当日予定されているプログラムです。
- 医療奉仕団基調報告「パレスチナ難民医療と子供支援を通して」
 「ナクバとは」 清末愛砂 (室蘭工業大学准教授 憲法学) 15分
 「占領下での差別、暴力により困難を極める難民と医療」
 猫塚義夫 (北海道パレスチナ医療奉仕団 団長 医師) 15分
 - 世界の難民問題と新型コロナウイルス感染の現状と支援策について
 奥村佳穂氏 (国連 UNHCR 協会 北海道連絡所) 15分
 - 「パレスチナ難民と新型コロナウイルス感染 現状と支援策について」
 清田明宏氏 (UNRWA 保健局長) 50分
- 注)清田氏はパレスチナよりオンライン出演予定です会場とオンラインセッションも予定しています。



清田明宏 UNRWA 保健局長
 1961年福岡県生まれ。
 高知医科大学 (現高知大学医学部) 卒
 結核予防会・結核研究所を経て国際協力機構 (JICA) でイメン結核対策プロジェクトに取り組み。その後世界保健機関 (WHO) で中近東の結核対策、三大感染症の責任者となる。
 2010年より国連パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA) の保健局長。3,100人の保健医療スタッフをまとめる。
 2015年第18回秋父宮妃記念結核予防国際功労賞受賞。

会場：札幌エルプラザ2階 環境研修室 (札幌市東区19条東22丁目5-13 TEL&FAX:011-780-2730)
 参加申し込みEメールアドレス hokkaido.palestine@gmail.com
 主催「北海道パレスチナ医療奉仕団」
 065-0019 札幌市東区19条東22丁目5-13 TEL&FAX:011-780-2730
 連絡先：090-8274-3163 (団長：猫塚義夫)
 共催：医療9条の会・北海道「たかさき憲法法律事務所」9条の会

クラウドファンディングによる
「没後1周年講演 Remember Dr. 中村哲」ご支援のお願い
 2020年12月19日(土)
 中村哲さん没後1周年 講演会
 Remember Tetsu Nakamura
 13:00 開場 13:30 開演
 会場：札幌エルプラザ3階ホール (北區北8街3 札幌駅北口)
 資料代：500円 学生 ZOOM参加者 無料



北海道パレスチナ医療奉仕団は、中村哲医師の没後1周年講演会『Remember Dr. 中村哲』を、哲さんとともに活動したベシャワール会の藤田看護師さんをお招きしての開催に向け、クラウドファンディングに挑戦しています。
 クラウドファンディングとは、インターネットで資金提供を呼びかけるもので、支援者様には、金額に応じた返礼品 (リターン) を送らせていただきます。頂いたご支援は、ベシャワール会 / PMS の活動支援金、講演会開催費、返礼品 (リターン) のポストカードをデザインしてくれるパレスチナ・ガザ地区のデザイナーへの支援金となります。詳細については、プロジェクトページをご覧ください。
 ご支援いただくには、サイトへの登録が必要になります。

クラウドファンディング (READY FOR) プロジェクトページ
<https://readyfor.jp/projects/45922>
 開催期間 2020年10月8日 10:00 ~ 2020年11月17日 23:00

【サイト登録を利用せずに協力いただく代理支援の仕方】
 サイト登録が不安、インターネット利用に不慣れな方には、代理支援をご利用いただけます。詳しくは2面(裏面)をご覧ください。
 クラウドファンディングを成功させ、講演会を開催したいと北海道パレスチナ医療奉仕団メンバー一同、強い思いでの挑戦です！ご支援、よろしくお願致します!!

藤田千代子さん 看護師・PMS 支援室長、PMS 総院長補佐
 1999年9月、中村哲医師の赴任先であったパキスタン・ベシャワールのミッション病院へ看護師として赴任。以降一貫して医療を中心に中村医師の現地活動を支え、20年近く現地で活動。1998年4月、日本の寄付でベシャワールに建てられた「PMS 基地病院」(総院長は中村医師)では『院長代理』の責務を果たした。
 ハンセン病やアフガニスタン難民診療、現地スタッフの養成、アフガニスタンやパキスタン山岳地域の診療に携わる。特に、イスラム教圏では数少ない女性医療従事者として、女性患者への看護や女性スタッフの養成などに力を注ぐ。一時的に用水路事業の権限を手掛ける。治安悪化の為2009年帰国。ベシャワール会事務局でPMS 支援室長及びPMS 総院長補佐として現地活動を支えている。

【サイト登録を利用せずに協力いただく代理支援の仕方】
 サイト登録が不安、インターネット利用に不慣れな方には、パソコンなどを使用せず代理支援をご利用いただくことができます。

- 希望のリターンに応じた金額を指定口座お振込み後、担当まで、以下の内容を記載の上、ご連絡をお願いします。
 ①ご希望の支援 (リターン) 内容 ②お名前 ③ご住所 ④返礼品の送付先住所と異なる場合は、返礼品の送付先 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス (無ければ結構です)
 お問い合わせ含めメール宛先 e-mail: cup_rera@yahoo.co.jp (担当 相澤)
- 振込手数料はご自身にてご負担。上記と同内容を振込用通帳欄にご記入ください。
 振込先口座：ゆうちょ銀行 記号 19110 番号 07885511
 口座名義 アイザワ エリ (北海道パレスチナ医療奉仕団 クラウドファンディング担当)

サイト内の応援コメント欄にご支援いただいた方のお名前、コメントを記載いたしますので、本名 NG の方はイニシャル等希望の旨を、お名前の後ろに記載をお願いします。
 応援コメントをサイトに載せることが出来ますので、空いたスペースには是非ご記入ください!

【ご希望の支援 (リターン) とは】
 ご支援いただいた方に、「お礼」を送らせていただきます。内容は、「第13次現地活動報告集」「オリジナルポストカード」を予定。ご支援いただいた金額により、ポストカードの枚数・種類が変わります。
 デザインはパレスチナ・ガザ地区のデザイナー カリマンさんに協力頂き、集まった資金の一部はカリマンさんへの支援金とさせていただきます。
 お手元に残ったポストカードをきっかけに、パレスチナの話題を少しでも、皆様の日々の会話の中に加えていただけたらと思っています。
 ※報告集は紙媒体です。ポストカードと共に郵送いたします。




クラウドファンディング (READY FOR) プロジェクトページ
<https://readyfor.jp/projects/45922>
 開催期間 2020年10月8日 10:00 ~ 2020年11月17日 23:00

【北海道パレスチナ医療奉仕団】
 整形外科医 猫塚義夫医師を中心に2010年に札幌にて結成。ヨルダン/川西岸地区・東エルサレム・ガザ地区にて医療活動を継続し、2015年からは子ども支援として教育・スポーツ支援と活動の幅を広げています。また、講演会の実施、アラブ文化を紹介するイベントや、パレスチナから医療従事者を招待し、技術研修も行っています。
 昨年は、札幌市の高校生が作成した「オリブの木 (葉にメッセージが書かれている)」やメッセージボードを、沢山のあたたかな気持ちと共に、現地へ届けることが出来ました。
 公式HP：http://www.hms4p.com/p/blog-page.html
 北海道パレスチナ医療奉仕団の活動のこま



企画・主催「北海道パレスチナ医療奉仕団」
 065-0019 札幌市東区19条東22丁目5-13 TEL&FAX:011-780-2730
 連絡先：090-8274-3163 (団長：猫塚義夫)
 クラウドファンディングへのメールでのお問い合わせ先 cup_rera@yahoo.co.jp (担当 相澤)

企画・主催「北海道パレスチナ医療奉仕団」
 065-0019 札幌市東区19条東22丁目5-13 TEL&FAX:011-780-2730
 連絡先：090-827403163 (団長：猫塚義夫)
 クラウドファンディングへのメールでのお問い合わせ先 cup_rera@yahoo.co.jp (担当 相澤)



シロウトする

現場の声を
聞いてみませんか？

パレスチナ難民の今を
「私たち」が知る。
そこに大きな意味がある。

令和2年
10月24日[土] 17:00~
オンライン開催 (Zoom)
主催；京都大学・同志社大学 1回生有志

素人でも知ろうとすれば

実際にパレスチナで支援活動をしている人の話を聞いて、難民についてちょっとだけ知ってみませんか？直接行動を起こすのは難しいかもしれませんが、ただ、たくさんの方が知ることによって、きっと何かが変わるはず。現地に行ったからこそわかる「パレスチナの人々の暮らし」や「パレスチナ問題の今」をお伝えします。

猫塚義夫先生

北海道パレスチナ医療奉仕団団長。札幌で整形外科医として勤務。2010年、北海道パレスチナ医療奉仕団を結成、以来10年間にわたって現地での支援活動や報告会を精力的に行う。



【プログラム】

- 16:30~ 開場
- 17:00~18:30 猫塚先生講演会 (カメラ・マイクオフ可)
- 18:40~19:00 質疑応答
- 19:00~20:00 意見交換会 (自由参加)

【対象】 どなたでも大歓迎！

【参加申込】 グーグルフォームにて受付
(定員は先着80名・参加費不要)

▷グーグルフォームQRコード

▽グーグルフォームURL

<https://forms.gle/f1LZdYKXvRFmaeXC8>

※Zoomについての詳細は後日お知らせいたします。



問い合わせ先：shiroutosuru@gmail.com

第13次支援活動以降の活動内容

2019年

- 11月28日（木）札幌東区青少年健全育成推進会主催「難民問題 講演会」（猫塚義夫）
- 11月30日（土）北海道民医連医師OB会「パレスチナ医療こども支援活動報告」
- 12月6日（金）札幌南校 "Library in Library" 「パレスチナ医療・こども支援活動」講演（猫塚）
- 12月21日（土）「表現の不自由・自由展 北海道」（猫塚、相澤依里、坂東和之）

2020年

- 1月6日（月）北海道自由法曹団 新年会 挨拶（猫塚）
- 1月23日（木）街頭宣伝:イラン問題と自衛隊中東派遣反対
- 1月25日（土）「中村哲医師追悼集会in 北海道」「第13次報告支援活動報告会」
- 2月7日（金）「護憲ネット・北海道」主催 講演会 パレスチナ難民支援活動と日本国憲法（猫塚）
- 2月29日（土）「イランと自衛隊中東派遣」学習・講演会「現代イランの文化と宗教」（松本 耿郎 先生）
- 3月12日（木）南が丘中学校「パレスチナ医療こども支援活動」報告（細川佳之）
- 3月14日（日）東京・科学者9条の会 講演会「パレスチナ・イスラエル問題講演」（清末愛砂）
- 4月23日（木）札幌医科大学 講義「国際医療」（猫塚）
- 5月10日（日）全国医系学生ゼミナール実行委員会 講演会「パレスチナ医療・こども支援活動」講演（猫塚）
- 7月1日（水）街頭宣伝:イスラエルの「入植地併合」人種差別反対
- 8月22日（土）清末先生出版記念会（清末、猫塚）
- 8月29日（土）「ナクバの日・2020年in北海道」UNRWA保健局長 清田明宏 先生
- 9月11日（金）安保法制違憲訴訟
札幌高裁証人尋問・控訴人本人尋問（猫塚、清末）
- 10月2日（金）国際法律家協会 講演（清末、猫塚）
- 10月11日（日）北広島9条の会 講演会「パレスチナ医療・こども支援活動」講演（猫塚）
- 10月22日（木）札幌創造学園 講演会「パレスチナ医療・こども支援活動」講演（猫塚）
- 10月24日（土）京都大学・同志社大学1回生有志主催「シロウトウル」講演会（猫塚）
- 11月26日（木）勤医協看護専門学校 講義（猫塚）
- 12月19日（土）「中村哲先生没後1周年 Remember Dr. Tetsu NAKAMURA」

「第13次パレスチナ医療・こども支援活動」報告集

発行日 2020年10月

発行 北海道パレスチナ医療奉仕団

発行責任者 団長 猫塚 義夫

〒065-0019 札幌市東区北19条東22丁目5-13 ☎090-8274-3163

<http://www.hms4p.com> E-mail : hokkaido.palestine@gmail.com

支援募金振り込み先

振替口座 : 02720-9-100675 振込先口座 : ゆうちょ銀行 二七九店 (279) 当座 0100675

制作 メディアデザイン事務所マツモト